

## 中国古文献にみえる石斛の産地

夏井高人

### 1 はじめに

出雲風土記や延喜式（典薬寮）にある「石斛」がどのような植物を意味したのかについては必ずしも明らかではない<sup>1</sup>。

近年における日本の植物学の通説においては、「ホンセッコク（本石斛，*Dendrobium catenatum* (Syn. *Dendrobium tosaense*))」<sup>2</sup>が本来の「石斛」に該当すると解釈している<sup>3</sup>。ホンセッコクは、従来は「キバナノセッコク（黄花石斛）」<sup>4</sup>として知られてきた植物と同一種で、中国では「鉄皮石斛」<sup>5</sup>と呼ばれている植

---

<sup>1</sup> 夏井高人「延喜式（土御門本）にみえる石斛の産地」やまくさ 63号 80頁

<sup>2</sup> 正式には「ホンセキコク」と記載するのが正しいと思われるが、本稿では、便宜、「ホンセッコク」と表記することにする。なお、「斛」は、日本の漢音では「コク」、呉音では「ゴク」とされているが、中国語発音（pinyin）では「hú」、韓国語発音では「gok」となっており、中国語発音だけ別のように思われるかもしれない。しかし、「hu」、「ku」及び「gu」はいずれも非常に近い音で、舌の付け根と口腔奥上部との隙間の間を通る空気の破裂音によって発生させられる。このような発音は印欧語族の人々にとっては非常に苦手なものの一つとされている。推測だが、もともとの音は「hu」と「ku」の間のような音で、下の付け根を口腔奥上部に接触させずすれすれの状態で発生させるような音だった可能性がある。この場合、聞き手によっては「hú」とも「gu」とも「ku」とも聞こえることだろう。他方で、中国古代では「石」も「斛」も度量衡単位の一つだったので（陳 夢華『漢簡綴述』（中華書局，1980）149～152頁），後代に「石」という度量衡単位が日本国に持ち込まれたころから「石」も「斛」も等しく「コク」と発音されるようになった可能性がある。他方、「石」は、日本の漢音では「セキ」、呉音では「ジャク」、中国語発音（pinyin）では「shi」、韓国語発音では「Sök」となっている。日本語の呉音と中国語発音は比較的近い。そして、「石斛」の中国語発音は「shihú」となる。あくまでも仮説に過ぎないが、古代日本において石斛と切っても切れない関係にある「スクナヒコナ神」の多種多様な表記のうち「少彦」は中国語発音の「shihú」に由来するもので、ただ、「少名毘古那」、「須久那美迦微」、「少日子根」などとして示される神と同一の神であるという認識があったために、訓読みにおいて「クスナヒコ」または「スクナビコ」と読むようになったのかもしれないとも考えられる。

<sup>3</sup> 北村四郎『北村四郎選集Ⅱ 本草の植物』（保育社，1985）307～308頁

<sup>4</sup> 正式には「キバナノセキコク」と記載するのが正しいと思われるが、本稿では、便宜、「キバナノセッコク」と表記することにする。

物と同一種とされている。「キバナノセッコク」は「ホンセッコク」の異名 (Synonym) という扱いになる。そして、日本で「セッコク (石斛, *Dendrobium moniliforme*)」<sup>6</sup> という和名を有する植物は、中国では「細茎石斛」と呼ばれている植物と同一種の植物で、ホンセッコクとは異なる。つまり、「セッコク」は、本草 (中薬, 生薬) の世界で「石斛」とされてきた植物とは異なるとする解釈ということになる。その結果、一般にセッコクとして知られている植物は、本草 (中薬, 生薬) としての本来の「石斛」ではないというややこしい関係が生じている。

同様のことは中国にもある。日本の領土内には、セッコク属 (*Dendrobium* spp.) のラン科植物として、セッコクキバナノセッコク及びオキナワセッコク (沖縄石斛, *Dendrobium okinawense*) の合計3種があるのみだが、中国はさすがに広い国だけあって非常に多くの石斛属ラン科植物が自生している。そして、それらセッコク属の植物は比較的無造作に『神農本草経』にある「石斛」と同じものであるとして製薬・販売されてきたので、ひどい混乱があるようだ<sup>7</sup>。ただ、現代中国における植物学者の中では、本来の意味での「石斛」とは、霍山石斛 (*Dendrobium huoshanense*)<sup>8</sup> を指すものと解する者が比較的多いようだ<sup>9</sup>。

本稿では、中国の古文献に示された「石斛」の産地を現代の地名にあてはめ、その地の気候等から種の同定を試みたいと思う<sup>10</sup>。無論、気候変動や地殻変動等

---

<sup>5</sup> 前掲『北村四郎選集Ⅱ 本草の植物』307頁は、「ホンセキコク」を「鉄皮石斛」を同一の種に属する植物であるとした上で、その学名として *Dendrobium officinale* を採用している。鉄皮石斛の学名を含め、キバナノセッコク等の分類については、後で詳述する。

<sup>6</sup> 正式には「セキコク」と記載するのが正しいと思われるが、本稿では、脚注2で示したような「石」と「斛」の本来の発音に関するやや面倒な問題があることを考慮し、便宜、現在の植物分類学上の標準和名としての表記である「セッコク」と表記することにする。

<sup>7</sup> 高宮知子・塩田奈央・飯島 洋・北中 進・WONGSAWAD Pheravut・田島奈津子・半田 高・遊川知久「Identification of *Dendrobium* species used for herbal medicines based on Ribosomal DNA-Internal Transcribed Spacer sequence database」*Biol Pharm Bull.* 2011;34(5):779-82, 包 雪声・順 慶生・張 申洪・金 良緑『中国薬用石斛図志』(上海科学技術文献出版社, 2005) 1頁, 冉 懋雄『石斛(名貴中薬材緑色栽培技術)』(2002, 科学技術文献出版社) 3頁

<sup>8</sup> 霍山石斛の分類については難しい問題がある。鉄皮石斛の分類との関係で後述する。

<sup>9</sup> 前掲冉 懋雄『石斛(名貴中薬材緑色栽培技術)』5頁など

<sup>10</sup> 植物の分布については、脚注の中で個別に示した書籍や論文等のほか、本稿全般において、中国科学院中国植物志編輯委員会編『中国植物志 第19巻』(科学出版社, 1999), 陳 心啓・吉 占和・羅 毅波『中国野生蘭科植物彩色図鑑』

による環境条件の変化・相違があり得るので、同一の場所であっても過去の気候が全く同一であるはずはないが、推測のための手がかりにはなるだろう。この分野における研究の一助となり得る何らかの示唆を提供することはできるのではないかと思う。

## 2 中国古文献上から推定できる地名

### 2.1 山海経

『山海経』(せんがいきょう)は、中国古代の戦国時代から秦、漢の時代にかけて複数の人々が見聞した内容を編纂し書物にまとめたものとされている。その中には怪獣のような不思議な動植物が描かれており、奇書的一种として扱われることが多い<sup>11</sup>。しかしながら、それは単なる空想の産物だけにとどまらず、客観的な生物観察記録であるものが含まれており、現代の動植物学において再評価すべき記述が含まれている。そして、古来、石斛に関する最も古い記録が『山海経』の中にあると理解されてきた。

問題の文は、『山海経』の一部である「西山経」の中にある。すなわち、「又西八十里，曰小華之山，其木多荊杞，其獸多牝牛，其陰多磬石，其陽多瑇瑁之玉，鳥多赤鷲，可以禦火，其草有葦荔，狀如烏韭，而生於石上，亦緣木而生，食之已心痛」とある。意識すると、「また，西方 80 里のところの小華山というところがあり，その地の樹木には荊や棘が多く，その地の動物には野生の牛が多く，その地の陰のところには磬石（サヌカイト）が多く，その地の陽のところには瑇瑁という玉石が多く，鳥には赤鷲<sup>12</sup>が多いが，火を払うことができる。その地には葦荔<sup>13</sup>という草がある。生えている様子は「烏韭」<sup>14</sup>に似ており，岩

---

(科学出版社，1999)，中国科学院昆明植物研究所/雲南省林業科学院編『蘭花—中国蘭科植物集錦』(中国世界語出版社，1998)，陳心啓・吉占和『中国蘭花全書』(中国林業出版社，1998)，Howard P. Wood, *The Dendrobiums*, A.R.G. Gantner Verlag, 2006, Bill Ravarack, Wayne Harris & Geoff Stocke, *Dendrobium and its Relatives*, Timber Press, 2000, を参考にした。

<sup>11</sup> 日本では妖怪的一种として知られる「九尾の狐」なども『山海経』に含まれている。

<sup>12</sup> キンケイ (*Chrysolophus pictus*) のことを指すものと思われる。

<sup>13</sup> 現代では、「葦荔」をクワ科のオオイタビ (*Ficus pumila*) を意味する「薜荔」と同義と解する見解が多い。

<sup>14</sup> イノモトソウ科のホラシノブ (*Sphenomeris chinensis*) のようなシダ植物のことを指すものと解するのが通説的な見解だとされている。しかし，確たる根拠があるわけではないが，字のかたちからすると，ウラボシ科(Polypodiaceae)に属

の上に生え、あるいは樹木の縁に生える。胸の痛みがあるときに服用する」というような具合になる。

この「葶藶」なる植物が何であるのかについて確実に同定する方法はない。シダ植物の一種を指すのかもしれないし、あるいは、シダ植物でもラン科植物でもない全く別の植物のことかもしれない。しかし、シダ植物であれば、そのように書き記したと思われるのに、わざわざシダのような植物で岩の上に生えるとしてシダとは区別した書き方をしているところから、石斛のことだろうと推定することになる<sup>15</sup>。

仮にこれが石斛のことを意味すると仮定した場合、その産地は、「小華山（小華之山）」という地域だったことになる。古来、小華山（標高 530～2491 メートル）は、現在の中国陝西省華県<sup>16</sup>にある山地のことを指すと解されてきた。現在、その周辺は、小華山国家森林公园に指定されている。その周辺の緯度は、北緯 36 度、平地の最低気温は摂氏零下 3 度～4 度、最高気温は摂氏 38 度くらいなので、山地の気温はそれよりも概ね 5～10 度程度低いと思われる。この気候は、日本では、西日本及び東日本の太平洋岸の山地とほぼ同じと推定できる。

現代の植生と過去の植生は異なると思われるが、現在、陝西省内で自生が確認されているセッコク属のラン科植物を列挙すると、細葉石斛（*Dendrobium hancockii*）<sup>17</sup>及び細莖石斛（*Dendrobium moniliforme*）の 2 種がある。南方系の石斛はもちろんのこと、鉄皮石斛（*Dendrobium officinale*）の自生もないようであり、セッコク属のラン科植物としては比較的耐寒性の強い種類のみが自生可能と思われる。

---

するシダ植物のことを意味していたのではないかと考えられる。後述するようにトクサ（木賊）と解する余地もある。

<sup>15</sup> セッコク自生地では、シダ植物等と一緒に野生のセッコクが岩の割れ目などに生育しているのを目にすることがある。また、セッコク等の着生蘭を栽培していると、ミズゴケなどにシダ植物が生えてくることをしばしば経験する。そのようなことから推測すると、ラン科セッコク属植物とシダ植物とは未解明ながら何らかの密接な関係があり、共生菌の繁殖、保湿、通気等にとって重要な意味があるのかもしれない。

<sup>16</sup> 華県は、明の時代である 1556 年 1 月 23 日（旧暦嘉靖 34 年 12 月 12 日）にマグニチュード 8 と推定される巨大地震が発生した地域ということでも知られている。また、「小華山」は、『水滸伝』の中にも登場する。

<sup>17</sup> 細葉石斛（*Dendrobium hancockii*）は、日本国内では「竹葉石斛」という名で流通している。ところが、竹葉石斛に類似するラン科植物で「姫竹葉石斛」及び「極姫竹葉石斛」という名で流通しているものもある。「極姫竹葉石斛」は、細葉石斛（*Dendrobium hancockii*）の矮生型（おそらく実生品）と推定されるので、同一種と考えて良い。「姫竹葉石斛」については、現状では来歴不詳であり、遺伝子解析等を踏まえた客観的かつ正確な分類がなされていない。

## 2.2 神農本草經及び名医別録

『神農本草經』（しんのうほんぞうぎょう）<sup>18</sup>は、伝説上の「神農（炎帝）」<sup>19</sup>の教えをまとめた中国最古の薬方書といわれており、漢～三国（魏・呉・蜀）の時代にまとめられたものと推定されている。唐の時代にはその原本が散逸し、失われてしまったと考えられていた。『神農本草經』を復元しようとする試みは古くからあり、陶弘景（西暦456～536年）によって整理・編纂された『本草綱目』がその代表的なものだと考えられる。現代においても、『名医別録』、『醫心方』<sup>20</sup>等に含まれている逸文、日本国の仁和寺などに現存していた写本<sup>21</sup>、その他多数の類書の記載を比較検討しながら、最初に書かれた『神農本草經』を復元するための作業が続けられている<sup>22</sup>。

さて、復元された『神農本草經』巻二の「石斛」の条には、石斛について、「一名林蘭。味甘，平，無毒。治傷中，除痺，下氣，補五藏虚勞，羸瘦，強陰。久服厚腸胃，輕身，延年。生山谷，水傍石上」とある。

石斛が生育する場所として「生山谷，水傍石上」とあるので、本来の石斛は、「山地の谷にある水辺の岩の上に生える」ということになる。「山谷」と表現されるのは、セッコク属に属するラン科植物だけではなく他の属のものも含め、岩上に岩生するタイプのラン科植物一般について非常に正しい観察結果を示すものではないかと思われる。山の冷たい水が流れる溪谷を構成する崖地のような場所では、水分をたっぷり含んだ白い朝霧が谷間全体を埋め尽くし、空中湿度が高い状態で維持され、暑い夏でも比較的冷涼であり、谷間であることから

---

<sup>18</sup> 「しんのうほんぞうけい」と読む立場もある。呉音では「きょう」または「ぎょう」と読み、漢音は「けい」と読むことに起因するものらしいが、学術分野の相違によって若干異なることがあり、必ずしも固定的な法則があるようには思われない。本稿においては、古代における読み（発音）が時代と共に変化してきたという事実を考慮してあえて統一せず、一般に用いられている読みに従うことにした。

<sup>19</sup> 傳 維康・呉 鴻洲（川井正久編訳）『中国医学の歴史（第2版）』（東洋学術出版社，2000）31頁

<sup>20</sup> 中国では完全に失われてしまっていたが、日本国には古写本が残存していた。現代日本語訳として、丹波康頼・榎 佐知子（全訳精解）『医心方』（全30巻・筑摩書房）がある。

<sup>21</sup> 正確には、『唐本草』とも呼ばれる『新修本草』20巻中の10巻（4巻，5巻，12～15巻，17～20巻）が保存されているらしい。馬 繼興『神農本草經輯注』（人民衛生出版社，2013）501頁にその比較検討結果が示されている。

<sup>22</sup> 前掲『神農本草經輯注』495～700頁参照

強風などからも守られているということが出来る<sup>23</sup>。

ただし、『神農本草經』において、別名（一名）として「林蘭」をあげているのは、岩上に岩生する石斛だけではなく、密生した森林内の樹木に着生して生育する木斛の存在を認識していたからだと思われる。つまり、「林蘭」との記載は、「木斛」の存在を示唆していると考えられる。

「味甘」とあるのは、古代中国の薬方における「五味」という考え方に基づく。五味は古来の五行説に由来するものだという。五味は、酸・苦・甘・辛・鹹の 5 種類の要素で構成されている<sup>24</sup>。

「平」とあるのは、中国古代の薬方における「薬気」という考え方に基づく。「薬気」に関しては古代から今日まで諸説ある。最も単純な「二気説」は寒・温（熱）の 2 種類の要素で構成されており、最も複雑な「八気説」は、大寒・寒・微寒・平・温・大温・熱・大熱の 8 種類の要素で構成されている。石斛の条が含まれている『神農本草經』巻一では「五気説」が採用されていると解されている。この五気は、寒・微寒・平・微温・温の 5 種類の気で構成されている<sup>25</sup>。

「無毒」とあるのは、人間の身体に対して有毒ではないということを示している<sup>26</sup>。一般に、ラン科植物には有毒植物がないとされている<sup>27</sup>。

続けて、石斛の薬品としての効能について縷々記載があるが、本稿は薬学論文ではないので省略する。ただ、最後に「延年」とある。日本国において石斛

---

<sup>23</sup> 現在でも自生個体が残存しているかどうか相当に疑わしいが、例えば、かつて、茨城県北部山地・溪谷にある断崖など岩の上にはセッコク (*Dendrobium moniliforme*) やウチョウラン (*Ponerorchis graminifolia*) が岩生して自生していた。それら自生のランの多くは濫獲によって消滅してしまっているものと思われる。しかし、もし自生個体が残っているとすれば、岩に生える野生ラン科植物の生態を理解する上で極めて貴重な環境資料となっただろうと考える。環境破壊と違法な採取等を防ぐため、その正確な場所の記載及び根拠となる文献等の出典表記は控える。

<sup>24</sup> 前掲『神農本草經輯注』13 頁

<sup>25</sup> 前掲『神農本草經輯注』16 頁

<sup>26</sup> 前掲『神農本草經輯注』2 頁

<sup>27</sup> 例外的なものとして、シプリペディウム・レギナエ (*Cypripedium reginae*) には毒性があり、ペットの犬などが植物体を食すると悪影響があるとの指摘がある。詳しくは、夏井高人「シプリペディウム・レギナエの毒性」らん・ゆり（東京山草会ラン・ユリ部会ニュース）394 号 8 頁で述べた。

Notes on poisoning: *Cypripedium reginae*

Government of Canada

[http://www.cbif.gc.ca/pls/pp/ppack.info?p\\_psn=152&p\\_type=all&p\\_sci=sci](http://www.cbif.gc.ca/pls/pp/ppack.info?p_psn=152&p_type=all&p_sci=sci) [2014 年 1 月 4 日確認]

の園芸品種のことを「長生草（長生艸）」または「長生蘭」と呼んでいるが、『神農本草經』において「延年」とあることがその語源かもしれない。「延年草」では日本語としてしっくりこないので、江戸町民にも理解しやすい平易な日本語として「長生草」と命名したのだろう<sup>28</sup>。

さて、『神農本草經』の石斛の条にはその産地の記載がない。

ところが、ほぼ同時期に成立したとみられる『名医別録』<sup>29</sup>には産地の記載があった。そのことから、『本草綱目』以降の時代には石斛の産地として『名医別録』にあったという産地記載を参照するのが通例となった。そして、その産地の記載としては「生六安」とある<sup>30</sup>。自生状況に関する記述である「生山谷水傍石上」と合わせて意識すると、「山谷の水辺にある岩に生える」、「六安の地に産する」ということになる。この六安とは、中国安徽省六安市付近のことを指し、その近辺にある山地・溪谷の岩場に着生して生える植物を指すと考えられている<sup>31</sup>。

この六安には霍山県があり、霍山石斛 (*Dendrobium huoshanense*)<sup>32</sup>の産地として知られている。霍山県付近は北緯 30 度、東経 116 度付近に位置する山岳地帯で、天柱山（標高 1489 メートル）が代表的な山となっている。安徽省全域における年間の最低気温は摂氏零下 8 度以下、最高気温は摂氏 38 度とされており、地域によっては（特に山地など標高の高い場所では）安徽省全体の平均気温よりも 5 度～10 度程度低いのではないかと思われる。

現代の植生と過去の植生は異なると思われるが、現在、安徽省内で自生が確認されているセッコク属のランを列举すると、細茎石斛 (*Dendrobium moniliforme*)、鉄皮石斛 (*Dendrobium officinale*)<sup>33</sup>、霍山石斛 (*Dendrobium*

---

<sup>28</sup> 現在、「延年草」は「延齡草」と同義のものとしてエンレイソウ (*Trillium smallii*) を示すために用いられている。

<sup>29</sup> 前掲『中国医学の歴史（第 2 版）』173 頁

<sup>30</sup> 前掲『神農本草經輯注』60 頁

<sup>31</sup> 南宋の姚寛が編纂した『西溪叢語』の石斛の条では、隋郡永陽縣（現在の安徽省滁州市来安県・南京市の北方に位置する。）に瀧石山という山があり、その山上に石斛を多数産するという趣旨のことが書いてある。溪流などの空中湿度の高い溪谷・岩場に自生するということからすれば、瀧石山もそれなりに起伏に富んだ山だろうと推測されるが、現在の地名ではどこに位置するのかわからない。

<sup>32</sup> 霍山石斛 (*Dendrobium huoshanense*) の分類については議論がある。鉄皮石斛の分類との関係で後述する。

<sup>33</sup> 文献の中には安徽省の「鉄皮石斛」を *Dendrobium candidum* として記載しているものがある。*Dendrobium candidum* は、園芸品種であるイセ (*Dendrobium Ise*) に類似した植物で、細茎石斛と鉄皮石斛との自然交雑種ではないかと思われる

huoshanense) 及び重唇石斛 (*Dendrobium hercoglossum*) の 4 種があるほか、南方系のセッコク属ラン科植物である高貴石斛 (*Dendrobium nobile*)<sup>34</sup>がある。セッコク属のラン科植物としては比較的耐寒性の強い種類のみが自生可能と推定される。南方系の種類が自生する地域は、同省南部の暖かい地域に限られている。

### 2.3 神農本草經集注(本草集注)

『神農本草經集注』(しんのうほんぞうぎょうしゅうちゅう) は、陶弘景(西暦 456～536 年)によって整理・編纂された薬方に関する書物で<sup>35</sup>、永元 2 年(西暦 500 年)ころに刊行され、『本草集注』との略称で知られている。当時、広く用いられていたらしいのだが、その後、『神農本草經集注』の改訂版に相当する『新修本草』が編纂され、次第に使われなくなって失われたとされていたが、敦煌発掘文書として知られていた古文書の中に唐代の写本が含まれていることが判明し、元の文章を復元できるようになってきた<sup>36</sup>。

『神農本草經集注』巻三の石斛の条には、「今用石斛出始興，生石上，細實，桑灰湯沃之，色如金，形似蚱蟻脾者為佳。近道亦有，次。宣城間生欒樹上者名木斛，其莖形長大而色淺。六安屬廬江，今始安亦出木斛，至虛長，不入丸散，惟可為酒漬煮湯用爾」とある。試みにこれを意識してみると、「現在用いられて

---

ものの、完全に信頼できる詳細な遺伝子解析結果報告は見当たらない。安徽省には細茎石斛と鉄皮石斛が存在しているので、*Dendrobium candidum* のような外部形質を有する交雑種が自然に発生することは十分にあり得ることだと思われる。そして、日本国にもそのようなタイプの「石斛」が中国からもたらされ、石斛の園芸品種である長生蘭の祖となった可能性を否定し切ることができない。<sup>34</sup> 後に詳論するとおり、デンドロビウム・ノビル (*Dendrobium nobile*) は、中国では「金釵石斛」または「石斛」と呼ばれることが多い。しかし、日本の植物分類学では、中国の古書にある「金釵石斛」または「石斛」とは中国名「鉄皮石斛」であるホンセッコク (*Dendrobium officinale*) を指すと理解する見解が一般的で、そのために、デンドロビウム・ノビル (*Dendrobium nobile*) を指す漢字名称としては「高貴石斛」を宛てるのが普通となっている。そこで、本稿では「高貴石斛」と表記することにする。なお、洋蘭園芸の世界では、「ノビル」と簡略な名称で呼ばれている。また、その交配種は、一般に、「ノビル系」と呼ばれている。ノビル系デンドロビウム交配種については、農山漁村文化協会編『花卉園芸大百科 15 ラン』(2001, 農文協) 140 頁以下で詳しく説明されている。

<sup>35</sup> 前掲『中国医学の歴史 (第 2 版)』169 頁

<sup>36</sup> 真柳 誠「3 巻本『本草集注』と出土史料」薬史学雑誌 35 巻 2 号 135～143 頁



いる石斛は興の地で産出するもので、茎は細く、これを桑の灰を溶かした湯に入れると金色に変色し、その形が蚱蜢髀<sup>37</sup>と似ているものが良い。(興の地の)近隣にも(産地が)あるが(興の地に産する石斛よりも)劣る<sup>38</sup>。宣城の地の櫟<sup>39</sup>の樹上に生えるものがあり、その名を木斛という。その茎は長くて色が薄い。現在は始安となっている六安の屬廬江にも木斛が産するが、(茎が)中空で長くなり<sup>40</sup>、丸薬や散薬に入れることはなく、酒漬けにしたり湯に入れたりして(煎

---

<sup>37</sup> シダ植物の一種と思われる。トクサ(木賊, *Equisetum hyemale*)のような植物か、または、ウラボシ科(Polypodiaceae)に属するシダ植物を示しているのではないだろうか。

<sup>38</sup> 前掲『北村四郎選集Ⅱ 本草の植物』308頁は、続く文を一緒にして「品質は宣城(安徽宣城県)のものに次ぐ」と訳している。「近道亦有, 次。宣城間生櫟樹上者名木斛」と読むか、「近道亦有, 次, 宣城。間生櫟樹上者名木斛」と読むかによって解釈が異なる結果となる。現代の中国でも見解の相違が存在しているらしい。

<sup>39</sup> クヌギ(*Quercus acutissima*)またはイチイ(*Taxus cuspidata*)あるいはそれらに類似する樹木のことを指すと考えられる。貝原益軒『大和本草』ではイチイガシ(*Quercus gilva*)をもって「櫟」と解している。樹木の種類によってラン科植物の着生の可否・難易が全く異なるし、共生菌の有無・程度も全く異なると考えられ、とりわけ最初の発芽の段階では共生菌の存在が必須となるので、今後、ラン科着生植物の生態を踏まえた検討により石斛が着生する「櫟」の同定がなされることを期待する。そのようにして「櫟」が同定されれば、逆に「木斛」を推定し同定することも可能となると思われる。なお、一般に、セッコク属ラン科植物が着生する樹木は、常緑広葉樹だとされている。おそらく、常緑性の高木は、その樹冠が夏の強い日光や冬の寒風を防ぎ、全体として生きたドームのようになって保湿力や保温力を発揮するため、着生ランが活着・生育しやすいというだけではなく、ラン科植物の発芽・生育にとって不可欠な共生菌の繁殖にとっても有利なのではないかと想像される。「櫟」が落葉性のブナ科植物であるクヌギを意味すると解する場合、このようなセッコク属ラン科植物における着生の生態と合わないことになる。したがって、「櫟」の意義については、同じブナ科の樹木でもシラカシ(*Quercus myrsinifolia*)やマテバシイ(*Lithocarpus edulis*)のような常緑高木を意味するものと解釈するほうが妥当だと考える。日本でも、ブナ科の樹木の果実のことを全て「ドングリ」と総称し、その樹木が常緑樹であるか落葉樹であるかをあまり意識しないということから類推してみると、「櫟」についても同じように考えることができるのではなかろうか。ちなみに、屋代弘賢『古今要覧稿』巻五草木部下には、「按に凡皇朝にて木斛の木上に生ずるものは必ず櫟木にのみかざらざれば西土といへどもまた同じ事なるべし 然るに近世に至り本草原始などにもなほ櫟木といへるものは全く拘れり 是はその始櫟木上にて見出せしより集注本草にはしかいへるを後の人すべてその木にのみ生ずるものとおもひなせしは疎漏なり」とある。

<sup>40</sup> デンドロビウム属の植物で茎が中空になるものはないので、おそらく、茎の

じて) 飲用するのみである」という具合になる<sup>41</sup>。

この文に出てくる「興」とは、広東省始興県を指すとされている。広州市の北東に位置し、すぐ北側は江西省となる。『神農本草經集注』にいう「石斛」とは、細茎石斛、鉄皮石斛またはそれに類似するラン科植物だった可能性が高い。

他方、「宣城」は、安徽省宣城市を指すものとされており、また、「六安屬廬江」は、安徽省六安市舒城県付近を指すものと考えられる。したがって、『神農本草經集注』にいう「木斛」は、安徽省に産する植物だったことになる。現代においては、「木斛(木石斛)」とは、デンドロビウム・クルメナツム (*Dendrobium crumenatum*) を指すものとされることが多い<sup>42</sup>。しかし、デンドロビウム・クルメナツム (*Dendrobium crumenatum*) は、安徽省に自生せず、ずっと暖かい台湾、フィリピン～東南アジア諸国に分布する植物なので、候補とすることができない。可能性の問題としては、近隣の江西省や広東省にも分布がある重唇石斛 (*Dendrobium hercoglossum*) を意味すると解すべき余地がある<sup>43</sup>。

そこで、「木斛」ではその茎が「虚」であるという表現の意味を「乾燥すると中空になる」と解すべきものと仮定すると、相対的に細胞組織が密ではなく疎になっているはずだと考える。このような観点から、組織の密度を比較してみると、細茎石斛 (*Dendrobium moniliforme*) 及び霍山石斛 (*Dendrobium huoshanense*) の茎の細胞組織はかなり緻密になっている<sup>44</sup>。重唇石斛 (*Dendrobium hercoglossum*) の細胞組織は細茎石斛及び霍山石斛よりは若干疎だがそれでもかなり緻密だと言える範囲内にある<sup>45</sup>。ところが、鉄皮石斛 (*Dendrobium officinale*) の茎の細胞組織は比較的疎になっており<sup>46</sup>、乾燥すると気泡の部分が増えることになることと推定される。そして、鉄皮石斛は、樹木に着生することがある。以上

---

太いタイプの種類であり、乾燥すると水分が抜けてすかすかになってしまうようなことを表現しているのではないかと推測する。なお、北宋の時代である宣和元年(西暦1119年)に寇宗奭が編纂・刊行した『本草衍義』には「將木斛折之、中虚如禾草」とある。意識すると、「木斛を折ってみると、稲のように中空となっている」というような意味となる。

<sup>41</sup> 夏井高人「石斛と木斛」らん・ゆり(東京山草会ラン・ユリ部会ニュース)426号10頁では異なる訳としたが、その後の検討結果を踏まえ、本文のように訳を改める。

<sup>42</sup> Christophe Wiart, *Medical Plants of China, Korea and Japan*, CRC Press, 2012, pp.102-103

<sup>43</sup> 重唇石斛 (*Dendrobium hercoglossum*) は、海拔590～1260メートルの山地にある常緑広葉樹の樹幹に着生し、または、湿った岩上に岩生して生育する植物であるとされている。

<sup>44</sup> 前掲『中国薬用石斛図志』17頁, 25頁

<sup>45</sup> 前掲『中国薬用石斛図志』60頁

<sup>46</sup> 前掲『中国薬用石斛図志』21頁

のような検討結果からすると、「木斛」とは、鉄皮石斛のうち樹木に着生して生育しているものを指すと理解するのが妥当であるように思う。

なお、高貴石斛 (*Dendrobium nobile*) の茎の細胞組織は、細胞組織を染色した断面写真を観るだけだと一見緻密そうに見える<sup>47</sup>。しかし、実際には茎が太く個々の細胞のサイズが大きいいため、乾燥するとかなり縮んで細くなってしまうという特性を有することから、「中空」と言えるかどうかは別として、組織が緻密であると評価することは難しいのではないかと思う。

## 2.4 通典

『通典』(つうてん) は、中国の上古から唐の玄宗朝の治世だった天宝年間(西暦 742~756 年)までの行政制度や徴税等を取りまとめた政書で、200 巻からなる大著だ。その中の唐の時代の記録である「賦税下」のところに徴税記録としての石斛の記録がある<sup>48</sup>。長文なので、石斛の部分だけ抜き書きすると次のとおりとなる。

弋陽郡貢	生石斛六十斤	今光州
廬江郡貢	石斛六十斤	今廬州
同安郡貢	石斛六十斤	今舒州
壽春郡貢	生石斛五十斤	今壽州
潯陽郡貢	生石斛十斤	今江州
南海郡貢	石斛二十斤	今廣州
始興郡貢	石斛二十斤	今韶州
臨封郡貢	石斛十小斤	今封州
南陵郡貢	石斛十小斤	今春州
開陽郡貢	石斛三斤	今瀧州
銅陵郡貢	石斛二十小斤	今勤州

ここでは「石斛」と「生石斛」とを意図的に明確に分けて記載していると考

---

47 前掲『中国薬用石斛図志』13 頁

48 日本の律令制における租庸調と同じように、物納による租税制度があり、石斛を税として収めていたものと推定される。『通典』の唐代における徴税記録は、同時に、当時における諸国産物の記録でもあるので、植物学の関係においても歴史資料としてかなり大きな価値があると考えられる。通常、植物学と租税の徴収とは無関係と考えられがちだが、今後、中国及び日本における古記録の解析を含め、この方面の研究が深められることを期待する。

えられ、「生石斛」ではない「石斛」は乾燥石斛を意味すると推定される。そして、生石斛中の水分を 80 パーセントと想定すると、乾燥石斛の重量は 20 パーセントとなる。そこで、乾燥石斛を生石斛の重量で換算するためには、乾燥石斛の重量をそれぞれ 5 倍すればよいことになる。そのようにして換算した結果は、次のようになる。

弋陽郡貢	生石斛六十斤	今光州
廬江郡貢	生石斛換算三百斤	今廬州
同安郡貢	生石斛換算三百斤	今舒州
壽春郡貢	生石斛五十斤	今壽州
潯陽郡貢	生石斛十斤	今江州
南海郡貢	生石斛換算百斤	今廣州
始興郡貢	生石斛換算百斤	今韶州
臨封郡貢	生石斛換算五十小斤	今封州
南陵郡貢	生石斛換算五十小斤	今春州
開陽郡貢	生石斛換算十五斤	今瀧州
銅陵郡貢	生石斛換算百小斤	今勤州

次に、重量単位の記載を見ると「小斤」と「斤」を使い分けているので、「斤」は「小斤」の 3 倍に相当する「大斤」を意味すると仮定した上で、唐の時代において 1 斤（小斤）は約 600 グラムとされているので（ただし、時代により若干の変動がある。また、計量上の誤差もあり得る。）、「小斤」を 600 グラム、「斤」をその 3 倍の 1800 グラムとし、上記の尺斤法による石斛重量を現在のメートル法に基づきグラム換算し、かつ、当時の地名を現代の地名に当てはめて書き直してみると、次のようになる。

弋陽郡貢	生石斛 108 キログラム	現在・河南省信陽市付近
廬江郡貢	生石斛換算 540 キログラム	現在・安徽省合肥市付近
同安郡貢	生石斛換算 540 キログラム	現在・安徽省安慶市付近
壽春郡貢	生石斛 90 キログラム	現在・安徽省六安市付近
潯陽郡貢	生石斛 18 キログラム	現在・江西省九江市付近
南海郡貢	生石斛換算 180 キログラム	現在・広東省広州市南部付近
始興郡貢	生石斛換算 180 キログラム	現在・広東省韶關市付近
臨封郡貢	生石斛換算 30 キログラム	現在・広東省肇慶市付近
南陵郡貢	生石斛換算 30 キログラム	現在・広東省陽春市付近
開陽郡貢	生石斛換算 27 キログラム	現在・広東省羅定市付近

一目瞭然で、唐の都長安に比較的近い安徽省から新鮮な生石斛が大量に供給されていた事実を推定することができるだろう。長安は、最盛期で人口 100 万人を数えたとされており、当時の水準としては巨大消費都市と表現して差し支えないと考えられる<sup>49</sup>。

安徽省に自生する石斛については既に述べたとおりなので、それ以外の地域について検討してみる。

河南省信陽市は、河南省の最南端に位置し、その南は安徽省となっている。環境条件は安徽省と似ていると思われるが、安徽省よりも更に北にあるので、より耐寒性の強い種類のものでないと自生できないと考えられる。現在、河南省内で自生が確認されているのは、細茎石斛 (*Dendrobium moniliforme*)、霍山石斛 (*Dendrobium huoshanense*)、細葉石斛 (*Dendrobium hancockii*) 及び曲茎石斛 (*Dendrobium flexicaule* (Syn. 河南石斛 *Dendrobium henanense*)) の 4 種。

江西省九江市は、江西省の最北端に位置し、その北は安徽省となっている。環境条件は安徽省とほぼ同じと思われる。現在、自生が確認されているものとしては、耐寒性のあるセッコク属ラン科植物である細茎石斛 (*Dendrobium moniliforme*)、鉄皮石斛 (*Dendrobium officinale*)<sup>50</sup> 及び重唇石斛 (*Dendrobium hercoglossum*) の 3 種があるほか、南方系の高貴石斛 (*Dendrobium nobile*) があ

---

<sup>49</sup> 唐の時代に『醫心方』が制定された後、日本国でも唐の制度にならい、大宝律令の下で『醫心方』が採用された。その結果、古来の『神農本草經』などに基づく薬方(倭方)が忘れ去られる危険性が生ずることともなった。そのために『大同類聚方』が編纂されたのではないかと思われる。『神農本草經』で薬草として扱われている植物の大半は野生植物であるのに対し、『醫心方』で薬草として扱われている植物の大半は栽培植物となっているのは、大量消費地としての大都市長安が安定した状態で長期間維持されていた結果、薬草原料としての野生植物に枯渇をきたし、畑で大量に栽培可能な植物を中心にして薬草を制定し直す経済的・社会的要因が存在していた可能性がある。そのことから更に類推すると、「石斛」もまた野生種の採取だけでは枯渇をきたしてしまい、安徽省などで石斛の人工的な栽培・増殖や交配による品種改良が既になされていた可能性があることを示唆するのに十分と思われる。このことはまた、『延喜式』に示されている「石斛」の中にも栽培品が含まれていた可能性を示唆することにもなる。なお、前掲「延喜式(土御門本)にみえる石斛の産地」のほか、夏井高人「大同のころには御寶とも名付給ひて」らん・ゆり(東京山草会ラン・ユリ部会ニュース) 435 号 6 頁を参照されたい。

<sup>50</sup> 前掲包 雪声・順 慶生・張 申洪・金 良緑『中国薬用石斛図志』49 頁は、日本のホンセッコク(キバナノセッコク)と同じタイプのものであり、*Dendrobium tosaense* だとしている。

る<sup>51</sup>。

そして、広東省広州市南部地域は、温帯～亜熱帯の気候にあり、年間の平均最低気温は摂氏 11 度、平均最高気温は摂氏 34 度程度となっている。沖縄本島那覇市付近と概ね同じ気温と考えて良い。現在、広東省内で自生が確認されているものは、細茎石斛 (*Dendrobium moniliforme*)、鉄皮石斛 (*Dendrobium officinale*)、広東石斛 (*Dendrobium wilsonii*)<sup>52</sup>、美花石斛 (*Dendrobium loddigesii*)、重唇石斛 (*Dendrobium hercoglossum*)、鉤状石斛 (*Dendrobium aduncum*)、羅河石斛 (*Dendrobium lohohense*)、密花石斛 (*Dendrobium densiflorum*) 及び聚石斛 (*Dendrobium jenkinsii*) の 9 種。耐寒性の乏しいものが多数を占めている。細茎石斛 (*Dendrobium moniliforme*) と広東石斛 (*Dendrobium wilsonii*) は、広東省北部にある南嶺山脈などに分布している<sup>53</sup>。

## 2.5 新修本草(唐本草)

『新修本草』(しんしゅうほんぞう) は『唐本草』(とうほんぞう) と呼ばれ、唐の時代である顕慶 2 年(西暦 657 年) ころ、蘇恭(599 年～674 年)<sup>54</sup>ら約 20 名の学者が共同で編纂した書物だとされる<sup>55</sup>。全 20 巻の大著。

『新修本草』巻三の石斛の条には、「今用石斛，出始興。生石上，細實，以桑灰湯沃之，色如金，形如蚱蟻脾者佳。近道亦有，次於宣城者。其生櫟木上者，名木斛。其莖至虛，長大而色淺」とある。これは、前述の『神農本草經集注』にある記述のうち木斛に関する部分以外の部分をそのまま転写しただけのものである。西暦 657 年ころの時点において「興」と「宣城」だったわけではないと解すべきだろう。

---

<sup>51</sup> 木島正夫・柴田承二・下村 孟・東 丈夫『廣川薬用植物大事典(修正版)』(廣川書店, 1967) 190 頁は、広東省に白花銅皮石斛 (*Dendrobium kwantungense*) があると述べている。

<sup>52</sup> 広東石斛 (*Dendrobium wilsonii*) は、Kew の分類では細茎石斛 (*Dendrobium moniliforme*) の異名 (Synonym) とされている。しかし、本来の広東石斛は、梵浄山石斛 (*Dendrobium fanjinshanense*) または梵浄山石斛と細茎石斛との自然交雑種を意味するものかもしれないとの疑いがある。

<sup>53</sup> 曾慶文・邢福武・王發國・陳振明『南嶺珍稀植物』(華中科技大学出版社, 2013) 91 頁

<sup>54</sup> 「蘇恭」は「蘇敬」と書くこともあるとのことなので、どちらでも間違いではない。日本国古代に権勢を振るったとされる蘇我氏と同じ「蘇」という字をもつ氏族が古代中国において薬方に深く関与していたという事実には非常に興味深いものがあり、好奇心をかきたてられる。後の宗代の蘇頌も同じ。

<sup>55</sup> 前掲『中国医学の歴史(第2版)』259 頁

ただし、木斛に関する記述は簡潔になっており、かつ、少し違う意味をもつように修正されているように思う。『神農本草經集注』では「近道亦有，次。宣城間生欒樹上者名木斛，其莖形長大而色淺」だったはずの部分が「近道亦有，次於宣城者。其生欒木上者」と修正されている。この部分を意識すると、「(興の地の) 近隣にも(産地が) あり，宣城の地にあるものが(興の地に産する石斛に) 次ぐものである。欒の木の上に生えるものがあり，その名を木斛という。その茎は，中空になり，長くて色が薄い。」となる。

さて、『新修本草』では，石斛の産地について，上記の文に続く効能の記載のあとに「今荊襄及漢中」とある。「荊襄」は，湖北省荊州市付近を指し，「漢中」は，陝西省漢中市付近を指すものとされている。

湖北省は，安徽省の西，江西省及び湖南省の北にあり，そして，荊州市は，北緯 30 度，東経 112 度付近に位置し，年間の平均最適気温は摂氏 1 度，最高気温は 32 度なので，比較的温和な地域だと言える。荊州市の南は湖南省となっている。日本では奄美～沖縄付近の気候に近いのではないかと思う。

現在，湖北省で自生が確認されているものとしては，広東石斛 (*Dendrobium wilsonii*)，鉄皮石斛 (*Dendrobium officinale*)，重唇石斛 (*Dendrobium hercoglossum*)，曲茎石斛 (*Dendrobium flexicaule* (Syn. 河南石斛 *Dendrobium henanense*))，細葉石斛 (*Dendrobium hancockii*)，美花石斛 (*Dendrobium loddigesii*) 及び高貴石斛 (*Dendrobium nobile*) の 8 種がある。

『新修本草』の記載が大雑把過ぎて何とも言いようがないが，大まかな推論としては，「荊襄」に産する石斛とは鉄皮石斛 (*Dendrobium officinale*) を指し，「漢中」に産する石斛とは細茎石斛 (*Dendrobium moniliforme*) を指したのではないかと考えることは可能なように思われる。

## 2. 6 圖經本草

『圖經本草』(ずけいほんぞう) は，北宗の時代である嘉祐 7 年(西暦 1062 年) ころ，蘇頌が編纂した書物で，全 20 巻の大著となっている。多数の図版が収録されており，博物学的見地からも非常に重要な書籍だと考えられる。この図版は，木刻版の図版による図鑑としては中国最古のものだとされている<sup>56</sup>。残念ながら，私は，まだ原本(写本)を読んでおらず，他の書籍に引用されているところからその内容を知るしかない。

北村四郎氏は，蘇頌『圖經本草』中の記載と推定される石斛の説明を引用し，蘇頌は「荊襄(湖北省江陵県)，光州(河南省潢川県)，寿州(安徽省合肥県)，江州(江西省九江県)，温州(浙江省永嘉県)，台州(浙江省臨海県)にもある」

<sup>56</sup> 前掲『中国医学の歴史(第 2 版)』317 頁

と書いている<sup>57</sup>。

「温州」とは、現在の浙江省温州市を指すものと推定される。浙江省は安徽省の東方にあってその東側は海に面している。ただし、永嘉県は温州市の北部を構成する行政区画で、海に面していない。年間の最低気温は摂氏 7 度、最高気温は摂氏 28 度程度でありあまり差がなく温暖な気候にある。日本では紀伊半島南部、瀬戸内海、四国付近の気候が比較的近いのではないかと思われる。現在、浙江省で自生が確認されているものとしては、細茎石斛 (*Dendrobium moniliforme*) 及び鉄皮石斛 (*Dendrobium officinale*)<sup>58</sup>の 2 種がある。

## 2.7 證類本草

『證類本草』(しょうるいほんぞう)は、『經史證類備急本草』(けいししょうるいびきゅうほんぞう)の略称。『經史證類備急本草』は、北宗の時代である元祐 5 年(西暦 1090 年)ころ、唐慎微が奉詔による『嘉祐本草』と蘇頌による『圖經本草』を合本し、加筆・校訂した上で刊行したもので、全 31 巻の大著。古来、中国薬方に関する非常に重要な書籍の一つとして尊重されてきた<sup>59</sup>。

『證類本草』には図版が付されており、その巻二には「温州石斛」と「春州石斛」の図がある。日本には、書写年不詳の『紹興校定證類備急本草画圖』が現存しており、早稲田大学図書館に収蔵されている<sup>60</sup>。『紹興校定證類備急本草画圖』は、南宋の時代である紹興 27 年(西暦 1157)に王繼先が編纂した書物で、『證類本草』に校注を加筆して編纂されたものとされている。

---

<sup>57</sup> 前掲『北村四郎選集Ⅱ 本草の植物』308 頁

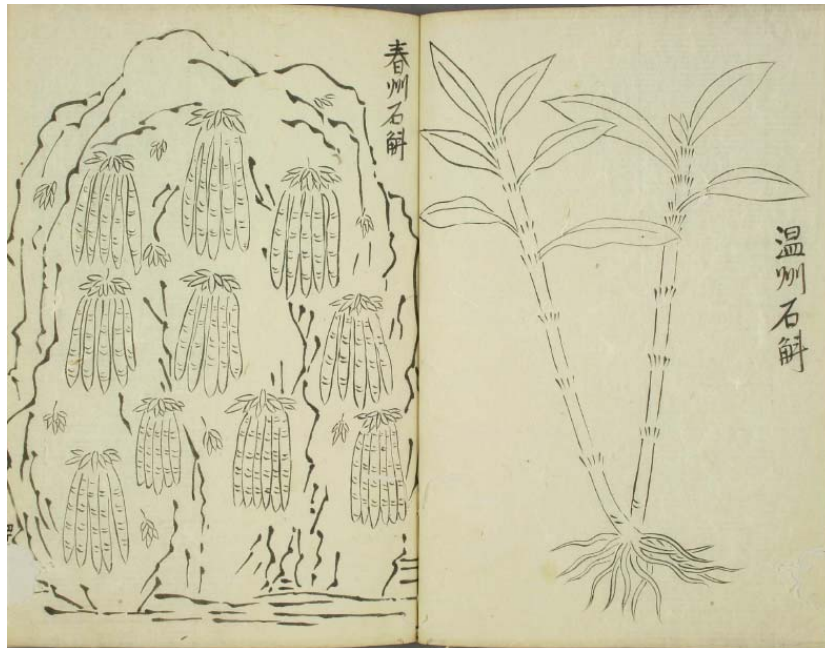
<sup>58</sup> 前掲冉 懋雄『石斛(名貴中薬材緑色栽培技術)』8 頁は、黄花石斛 (*Dendrobium tosaense*) であるとしている。また、前掲『廣川薬用植物大事典(修正版)』190 頁は、黄花銅皮石斛 (*Dendrobium crispulum*) であるとしている。

<sup>59</sup> 前掲『中国医学の歴史(第 2 版)』322 頁

<sup>60</sup> 紹興校定証類備急本草画図. 卷之 1-5

[http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/ni01/ni01\\_00830/index.html](http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/ni01/ni01_00830/index.html) [2014 年 1 月 2 日確認]





早稲田大学図書館所蔵『紹興校定證類備急本草画圖卷之二』にある石斛図

「春州」とは、現在の広東省陽春市のことだと推定される。気候と石斛の自生については上記の広東省広州市とほぼ同じと考えてよいだろう。

『紹興校定證類備急本草画圖』にある「春州石斛」の図が示す姿は、岩上に着生する植物であり、葉が根の近くに集中している姿からすると、セッコク属 (*Dendrobium* spp.) に属する植物ではないように見えるかもしれない。しかし、下垂したようになっている多数の茎には石斛属特有の節があり、その形状がいかにもそれらしい雰囲気漂わせている。ただし、その種類は判別できない。

これに対し、『紹興校定證類備急本草画圖』にある「温州石斛」の図は、明らかにセッコク属 (*Dendrobium* spp.) に属するラン科植物を示すものと判断可能だ。鉄皮石斛 (*Dendrobium officinale*) を示すものと解する余地はあるけれども、茎が直立している様子から、細茎石斛 (*Dendrobium moniliforme*)、広東石斛 (*Dendrobium wilsonii*) または梵浄山石斛 (*Dendrobium fanjinshanense*) を示すものかもしれない<sup>61</sup>。そして、『紹興校定證類備急本草画圖』にある「温州石斛」の図を前提とする限り、この図の温州石斛の葉の先端が尖っているという特徴を示しており、この点に着目すると、温州石斛は、高貴石斛 (*Dendrobium nobile*) ではない。この温州石斛の図では、葉は中心葉脈の左右において対称・相似形となっているように描かれている。しかし、高貴石斛 (*Dendrobium nobile*) の葉

<sup>61</sup> 現在の広東省では絶滅してしまった種なのかもしれないという可能性を否定することができない。そのため、更に深い研究を重ねた上でないと、多くの人々から賛同を得られる程度の同定に至ることができそうにない。

の先端は尖っておらず鈍形で、しかも葉の中心葉脈の左右において長さが異なっており、左右対称の相似形とならないことがしばしばあり、個体によっては葉先が割れたような感じになるものがあるからだ。

ところが、「春州石斛」と「温州石斛」の図には何通りかの異なる版のものが存在しているということが知られている。いずれも『證類本草』に基づき、後代の学者等によって校訂され作成されたものだ。ところが、おそらく解釈が異なること、また、何らかの商業的利益がからんでいることなどの事情に起因して、まるで違う植物であるかのように描かれている図が存在する<sup>62</sup>。

例えば、北宋の時代である元祐5年（西暦1090年）ころ、唐慎微によって編纂されたという『重修政和經史証類備用本草』にある「温州石斛」の姿は、『紹興校定證類備急本草画圖』にある「温州石斛」とは異なり、葉の先端が割れたような感じで左右非対称となっている。これは、明らかに高貴石斛（*Dendrobium nobile*）の特徴を示すものだと言える<sup>63</sup>。



『重修政和經史証類備用本草』にある石斛図

あくまでも想像に過ぎないが、北宋の時代には、石斛の園芸栽培が盛んになり、温州を中心にして南方から高貴石斛などの美花を開花させる石斛類が輸入され、それが宋の国内外に輸送・販売されていたのかもしれない。ところが、西暦1127年に女真族の金に国土の北半分を奪われ、南半分だけが南宋として残った時代以降には、南方からの高貴石斛の輸入や移入が減少または消滅し、も

<sup>62</sup> 中国石斛网：为石斛之标准而探源

<http://www.shihu360.com/Item/5763.aspx> [2014年1月3日確認]

<sup>63</sup> この図は、李占永編『重修政和經史証類備用本草（上）』（中国中薬出版社、2013）416頁でも採用されている。

ともとあった広東石斛だけが残ったことから、『重修政和經史証類備用本草』から約 100 年後に『紹興校定證類備急本草画圖』されたときには現物の高貴石斛が存在せず、何かの間違いだらうと判断され、現存していた広東石斛などをもとに図が作り直されてしまったという仮説が成立し得る。

いずれにしても、これらの図が示す植物がもし石斛であるとすれば、単に広東省及び浙江省に存在した石斛の図として最古のものであるというだけでなく、おそらく世界で最古の石斛図ということになるのではないかと思う<sup>64</sup>。

なお、『圖經本草』の原本を読んでいないので確たることは言えないのだが、『證類本草』が『嘉祐本草』と『圖經本草』を合本したものを基礎として編纂されたものだという経緯からすると、『圖經本草』の原本にあった図はもっと精度の高いものだった可能性がある。近い将来において、『圖經本草』の最も信頼できる写本をデジタル化した資料の公開や図版を含めた復刻版の出版がなされることを大いに期待したい。

## 2. 8 文献通考

『文献通考』(ぶんけんつうこう)は、上古から南宋寧宗朝の開禧3年(西暦1207年)までの歴代の制度の沿革を記した政書の一つ。元の時代である延祐4年(西暦1317年)、馬端臨(1254~1324年)が完成させたとされている。

『文献通考』卷二十二の「土貢考一」には、上記の『通典』と同じように、石斛を税として納めたという徴税記録がある。石斛の記述のある部分だけ抜き書きすると、次のようになる。

弋陽郡貢	生石斛六十斤	今光州
廬江郡貢	石斛六十斤	今廬州
同安郡貢	石斛六十斤	今舒州
壽春郡貢	生石斛五十斤	今壽州
潯陽郡貢	生石斛十斤	今江州
南海郡貢	石斛二十斤	今廣州
始興郡貢	石斛二十斤	今韶州
臨封郡貢	石斛十小斤	今封州
南陵郡貢	石斛十小斤	今春州
開陽郡貢	石斛三斤	今瀧州
銅陵郡貢	石斛二十小斤	今勤州

<sup>64</sup> 陳心啓・吉占和編著『中国蘭花全書』(中国林業出版社, 1998) 5 頁

これは、上記『通典』と全く同じ内容になっているので、唐代における徴税結果を転写しただけだと判断すべきだろう。

## 2.9 札樸

『札樸』（さつぼく）は、清の時代である嘉慶 18 年（西暦 1813）に桂馥（1736～1805）によって編纂・刊行された書籍で、全 10 巻。その巻十の「石竹」の条に「順寧山石間有草，一本数十莖，莖多節，葉似竹葉，四五月開花純黃，亦有紫，白二色者，土人謂之石竹。案即石斛也。移植樹上亦生」との興味深い記述がある。意識すると、「順寧の山地の岩の間に草があり，1 本に数十の莖があり，莖には多くの節があり，葉は竹の葉に似て，4 月から 5 月に純黄の花を開く。また，紫色のものや白と他の色の混ざったものもある。現地の者が言うには，これは石竹だとのこと。思うに，これは石斛である。樹木の上に移植するとまた生える」という意味になる。

『札樸』にある「順寧」は清の時代にあった地名で，現在の地名では雲南省臨滄市鳳慶県付近のことを指す。この地域は，隣国ミャンマーとの国境に近く，北回帰線（北緯 23 度付近）前後に位置し，標高は 500～2000 メートル前後，年間の平均気温は 17.5 度，複雑な地形に富み，苗族などの少数民族が混在して居住している。最近では，農業（園芸栽培）としての石斛の栽培に適した地として注目されているらしい。

さて、『札樸』の記述から理解できることは，雲南省に居住する少数民族の中には，中国人にとって「石竹（shí zhú）」と聞こえるような発音をする者があったということだ。この種の問題は非常に難しく，もともとそのような発音だったのか，それとも，最初は中国人にとっても「石斛（shí hú）」と聞き分けることのできる音だったものが長い年月の間に変化して聞き取りにくくなってしまったのか，過去の出来事なので，どちらとも決め手がない。また，「石斛」の別名である「石薺（shí zhú）」と「石竹（shí zhú）」とは全く同音なので，本来は「石竹（shí zhú）」ではなく「石薺（shí zhú）」が正しかったのかもしれないのだが，これまたどちらとも言いがたい面はある。他方，『札樸』の記述だけでは，「石竹」と字に書くことによって識別可能な植物であったのか，『札樸』の作者がそのように理解して文字にただけかのかも判然としない。しかし，音的にも意味的にも「斛」と「竹」とが非常に密接な関係を有しているかもしれないということを示唆していると判断することはできると思われる。

この点をとらえて，夏 緯瑛氏は，「石斛」，「石薺」及び「石竹」は音としては全部同じものであり，意味的には「岩の間に生える竹のような草」として理解することができるから，結局，石斛の「斛」とは「竹のような」という意味

に解することができる」と述べている<sup>65</sup>。念のために附言すると、『札樸』にある「石竹」は、①竹の葉のような形の葉を持ち、②茎が数十本生えており（叢生するという趣旨と解される。）、③茎に節が多数あるという特徴を有していることから、これがナデシコ科（石竹科）のセキチク（*Dianthus chinensis*）とは別の植物であることは明らかだと言える。

なお、『札樸』にある「石斛」は、複数の種類のものをまとめて記載していると思われる。同一の株から、黄色、紫色、白などの花が咲き出すということではないと解するのが合理的だからだ。そして、雲南省には色とりどりの花を咲かせる数多くの種類のラン科植物が存在していること、それらの多くはミャンマー、タイ、ヒマラヤ、インド北部などのラン科植物と共通するものだということは周知のとおりだ。黄色の花を咲かせていたものは、鼓槌石斛（*Dendrobium chrysotoxum*）やそれに類する種類のものだったのに違いない。

### 3 金釵石斛の解釈

『本草綱目』（ほんぞうこうもく）は、明の時代に李 時珍（1518年～1593年）によって編纂され、万暦6年（西暦1578年）に完成、万暦23年（西暦1596年）に上梓された書籍。中国から輸入された『本草綱目』の和刻出版が寛永14年（西暦1637年）になされて以降、日本国の本草学にも多大の影響を与えたとされている<sup>66</sup>。

この『本草綱目』には「金釵石斛」（きんさせっこく）の記述がある。すなわち、「石斛名義未詳。其莖狀如金釵之股，故古有金釵石斛之稱。今蜀人栽之，呼為金釵花」とある。意識すると、「石斛という名の字義は正確にはよく分からない。その茎の形状が金釵の股の部分のようであることから、古くから金釵石斛と称されてきた。現在では、蜀の人たちがこれを栽培し、金釵花と呼んでいる」ということになる。「金釵」と似た形の茎であることが語源であると示唆されているにもかかわらず、「金釵花」のほうを重視し、「美しい花を咲かせる石斛」を意味すると曲解する見解まである。『本草綱目』にいう「蜀」とは、現在の四川省～雲南省あたりを指す。この地域では、既述の『札樸』にも示されているような色とりどりの華やかな花を咲かせる南方系のデンドロビウム（*Dendrobium*）が多数自生しており、それらが明の時代既に園芸栽培されていたのだろう<sup>67</sup>。

<sup>65</sup> 夏 緯瑛『植物名釋札記』（農業出版社、1990）30頁

<sup>66</sup> 杉山つとむ『小野蘭山 本草綱目啓蒙一本文・研究・索引一』（早稲田大学出版局、1974）所収「序にかえて一本草學と『本草綱目啓蒙』の成立一」3頁

<sup>67</sup> あくまでも机上の仮説に過ぎないが、もしかすると、商業的利益を目的として、現在の東南アジア、ヒマラヤ及びインド北部あたりから大量の石斛が中国

いずれにしても、『本草綱目』において特に「金釵石斛」に言及していることに起因するものかどうか、従来、中国では、「金釵石斛」が種々の石斛類中でも最上のものとされてきた。そして、その同定としては、高貴石斛 (*Dendrobium nobile*) が「金釵石斛」に該当するとの見解が多かった。最近では、高貴石斛 (*Dendrobium nobile*) を『神農本草經』にいう「石斛」に該当するとした上で、『本草綱目』にある「金釵石斛」と同一の植物であると記載している書籍がかなり多数ある<sup>68</sup>。

しかしながら、『神農本草經』にいう「石斛」がどのような植物を指していたかは、ここまでの検討で既に明らかになったと思う。すなわち、中国の古文献中に記載のある石斛産地に分布し得る形質を具備したラン科セッコク属植物種に絞り込むという観点から検討すると、本来の意味での「石斛」とは、主として安徽省及びその近隣の山地・岩上に自生する細茎石斛 (*Dendrobium moniliforme*) 及び霍山石斛 (*Dendrobium huoshanense*) を指すものと推定するのが妥当だ。また、「木斛」とは、樹木に着生する、鉄皮石斛 (*Dendrobium officinale*) を指すものと推定することができる。高貴石斛 (*Dendrobium nobile*) は候補から除外されなければならない。

---

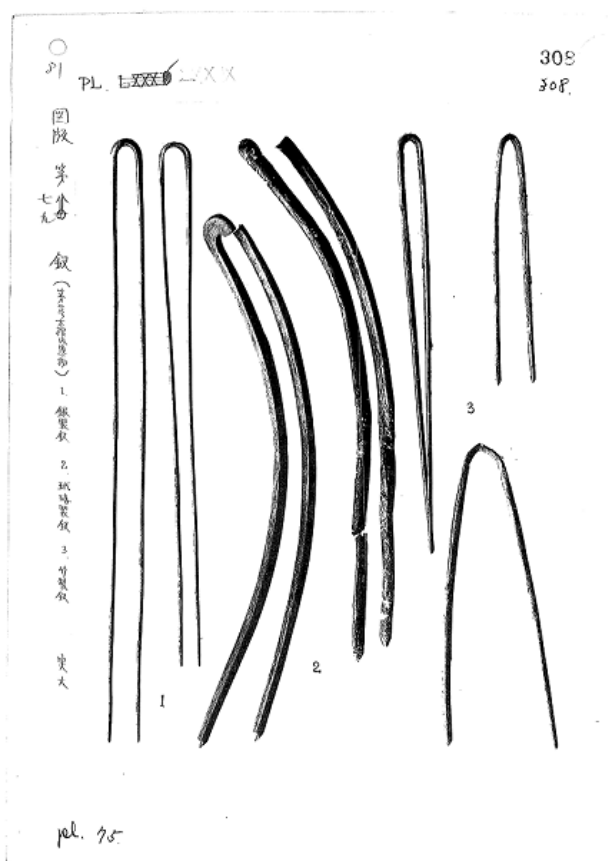
人商人によって採取・輸入され、その一部は、『札樸』内の記述にもあるように樹木に植栽して栽培され、保存・増殖・販売されていたのかもしれないと考える。仮にそうであるとした場合、現代と同じで、商業主義のために学問上の正しい知見が歪められてしまうということはあることだと考える。中国の商業蘭園芸の歴史について再検討の余地があるのではないかと思う。同様に、四川～雲南にある東南アジア系石斛について、史前からの自生種なのか、明代以降に四川省や雲南省の人々が植栽してきたものの子孫なのか、これまでとは異なる視点での研究も必要なのではなかろうか。それにしても、もしこの仮説が真実であるとすれば、まさに「温州商人おそるべし」ということになる。温州商人は、時代の変化を察知する能力が非常に高く、投資の対象を決して誤らないがゆえに金持ちなのだということでは知られている。温州商人には「三板精神」というものがあり、「白天当老板，晚上睡地板，還有看黑板」と表現されるのだそうだ。意識すると、「昼は経営者をやり，夜は地面で眠り，それでも勉強をする」ということになる。勤勉の極みと評価すべきだろう。これまた単なる仮説に過ぎないが、その温州商人が石斛斑入品種等を江戸時代の長崎経由で上方に持ち込み、それが江戸までひろまって長生草ブームが起きたのかもしれない。

「石斛東征」とでも言うべきか。なぜなら、天保6年(西暦1835年)に刊行された秋尾亭主人『長生草』にある兜咲き紅色花品種「紅雀」は、どう見ても日本には自生する植物には見えないからであり、また、「金龍」や「銀龍」は当時から「唐物」として知られていたからだ。ただし、在来の日本の石斛の中にも古代に渡来したと推定すべきものがある。これについては、更に研究を深めた上で、稿を改めて論じたいと思う。

<sup>68</sup> 前掲『中国薬用石斛図志』は、そのような見解に立脚して書かれている。

次に、「金釵」の字義について検討してみると、形式的には金や銀のような貴金属に属する金属製の「釵」という意味を有するから、「貴金属のような美しさ」という要素を重視すれば、細茎石斛（*Dendrobium moniliforme*）、霍山石斛（*Dendrobium huoshanense*）及び鉄皮石斛（*Dendrobium officinale*）よりも高貴石斛（*Dendrobium nobile*）のほうが華麗さと美しさにおいて勝っているから、高貴石斛（*Dendrobium nobile*）がそれに該当すると考えるのは自然な発想ではないかと思う。

しかしながら、そもそも貴金属製の「釵」とはどういう形状の道具であったのかについて、古代の遺物を参考に検討してみると、形状の相似という点では、むしろ細茎石斛（*Dendrobium moniliforme*）が最も条件を満たしていると理解することも可能だ。例えば、朝鮮平安南道大同郡南串面南井里彩篋塚出土の銀製の「紗」の写真<sup>69</sup>を観てみると、それは、現代の最もシンプルなタイプのヘアピン（髪どめ）と全く同じ形状をしているものだ。決して花の形状ではない。



朝鮮平安南道大同郡南串面南井里彩篋塚出土各種釵

(1: 銀製, 2: タイマイ製, 3: 竹製)

<sup>69</sup> 東洋文庫梅原考古資料画像データベース写真・図版第 75

そして、ヘアピンを実際に髪に挿している状態ではなく、ヘアピンの中間部にあり U 字型に折れ曲がっている部分を茎の根本とし、ヘアピンの先端部を茎の上部として考えてみると、「釵」とは「石斛」の茎が 2 本直立している様子を示していると理解することができる。あるいは、ヘアピンが花の一部を示すものだという理解を前提にした場合でも、ヘアピンのように 2 本の花柄が「Y」の字のように開いてつくのは細茎石斛 (*Dendrobium moniliforme*) の重要な特徴の一つなので、結局、細茎石斛 (*Dendrobium moniliforme*) の特徴を示す表現だと考えても何の無理も存在しないことになる。

加えて、このような形状としての特徴を重視すると、鉄皮石斛 (*Dendrobium officinale*) が「釵」の特徴を有していないということに気づくことができる<sup>70</sup>。なぜなら、鉄皮石斛 (*Dendrobium officinale*) の茎は、基本的に直立せず、屈曲して伸びたり、ジグザクのように交互に折れ曲がって伸びたりすることが普通だからだ。しかも、その花茎から伸びる 2 本の花柄は、単純な相似形としての「Y」または「V」の形状ではなく、日本の石上神宮（奈良県天理市）に伝わる「六叉の鉾」のような枝咲きとなり、2 個以上の複数の花を咲かせるのが一般的だ<sup>71</sup>。これは、「釵」の形状的特徴と矛盾する形態的特徴だと言える。

以上のように解釈すべきだろうと考えるが、もし「金」という字にこだわる必要があるのであれば、「金」とは輝く黄色を意味する語なので、これまで検討した結果に基づく限り、輝く黄色の花を咲かせる細葉石斛 (*Dendrobium hancockii*) 以外に該当する植物はないのではないかと思う<sup>72</sup>。

---

<sup>70</sup> 一般に、鉄皮石斛 (*Dendrobium officinale*) が「金釵石斛」に該当するという見解では、鉄皮石斛が多花性の植物だということに着目し、「釵」に附属させた各種の飾り（携帯電話のストラップの飾りのようなもの）がキラキラと輝く様子を連想させるとして、その根拠の一つとしている。しかし、このような見解は、「釵」自体の形状に着目するものではない。

<sup>71</sup> 鉄皮石斛と細茎石斛の交配品または自然交雑であるイセでは、交配親の一方である細茎石斛の外形的形質要素が優先的に発現し、「V」または「Y」の形状をなして花茎・花柄から相似形で 2 個の花を咲かせるタイプのものが存在する。

<sup>72</sup> 『神農本草經集注』では似ると茎が黄色くなるとしているから、茎の色だと考えると、どの種類でも一応該当すると考えることもできる。ちなみに、石斛の園芸品種である長生蘭では、芽変わりによって葉緑素や紅色色素が抜けた黄色の茎になることがある。これを飴色の茎（矢）であることから「飴矢」と呼ばれている。したがって、そのような飴矢に変化したものを指すとの見解も理論上ではあり得る。けれども、飴矢に変化するのは極めて稀というべきなので、一応このような見解は除外して良いと考える。なお、長生蘭の形質変異（芸）については、安藤 三『長生蘭』（日本長生蘭協会、1980）、笹山三次『蘭譜』（改造社、1932）、堀内一博『長生蘭の栽培と増殖』（池田書店、1990）、堀内一博『ポケットカラー事典長生蘭—200 種の特徴と楽しみ方・育て方』（三心堂出版



## 4 鉄皮石斛の植物分類学上の取扱い

『神農本草經』にいう「石斛」が鉄皮石斛 (*Dendrobium officinale*) または霍山石斛 (*Dendrobium huoshanense*) を指すものと解すべき余地があることは否定できない。しかし、本稿のここまでの論述において、鉄皮石斛の分類学上の扱いについては、あえて曖昧なままに論述を進めてきた。それは、そもそも中国の古文献に記載のある「石斛」がどのような植物を指すのか明確ではないこと、そして、現代において、「鉄皮石斛」と呼ばれているラン科植物及びその近縁種の分類に関し、植物分類学上の重大な争いがあるからだ。無論、中国の古文献が書かれた当時には存在していたのだけれど、現時点では絶滅してしまった種が存在する可能性も否定できない<sup>73</sup>。

とはいえ、本稿では、中国の古文献にある石斛の記述からその産地の地名を割り出し、その地名が示す場所に自生し得る種を現代の植生分布から推定するという手法を提示した。そうである以上、現代の植物分類学における鉄皮石斛に関する学問上の争点を正確に認識・理解することの重要性がますます高まったとも言える。

そこで、英国王立植物園 (Kew) における分類上の考え方、日本国政府における学名の取扱い、そして、中国において標準的だと思われる分類上の考え方について、その概要を紹介したいと思う。加えて、中薬 (生薬) として流通している「石斛」の源基に関する遺伝子解析結果についても簡単に紹介する。ただし、本稿が山野草愛好家の雑誌に掲載されるものだとすることを考慮し、余りに専門的過ぎる事柄には深入りしない。

### 4.1 Kew の分類

Kew の分類では、鉄皮石斛 (*Dendrobium officinale*)<sup>74</sup>、霍山石斛 (*Dendrobium*

---

社, 1997) が詳しい。また、石井勇義 (牧野富太郎校訂) 『増補改訂版原色園芸植物圖譜 下巻』 (誠文堂新光社, 1940) 1002~1005 頁, 東洋蘭柄物編集委員会編『東洋ラン・柄物』 (誠文堂新光社, 1967) 221~234, 古典園芸植物編集部編『愛蔵版古典園芸植物第2集<土佐寒ラン・フウキラン・チョウセイラン・オモト>』 (樹石社, 1980) 37~40 頁, 93~108 頁に解説及び写真がある。

<sup>73</sup> この点については、夏井高人「狸狽事件判決再考」法律論叢 85 巻 2・3 号 327 頁でも同様の問題点の指摘をした。

<sup>74</sup> 日本国の領土内には鉄皮石斛 (*Dendrobium officinale*) のタイプに該当するものの自生はないとするのが通説。

*huoshanense*)<sup>75</sup>, 黄花石斛 (*Dendrobium tosaense*)<sup>76</sup>, 伏牛石斛 (*Dendrobium funiushanense*)<sup>77</sup>及び黄石斛 (*Dendrobium stricklandianum*)<sup>78</sup>は, 次のとおり, 全て黄石斛 (*Dendrobium catenatum*) の異名 (Synonym) ということになっている<sup>79</sup>。Flora of China も全く同じ見解を示している<sup>80</sup>。

*Dendrobium catenatum* Lindl., Gen. Sp. Orchid. Pl.: 84 (1830).

Heterotypic Synonyms:

*Dendrobium stricklandianum* Rchb.f., Gard. Chron. 1877(1): 749 (1877).

*Callista stricklandiana* (Rchb.f.) Kuntze, Revis. Gen. Pl. 2: 655 (1891).

*Dendrobium tosaense* Makino, J. Bot. 29: 383 (1891).

*Dendrobium pere-fauriei* Hayata, Icon. Pl. Formosan. 6: 70 (1916).

*Dendrobium tosaense* var. *pere-fauriei* (Hayata) Masam., J. Soc. Trop. Agric. 4: 196 (1933).

*Dendrobium officinale* Kimura & Migo, J. Shanghai Sci. Inst. 3: 122 (1936).

*Dendrobium huoshanense* Z.Z.Tang & S.J.Cheng, Bull. Bot. Res., Harbin 4: 142 (1984).

*Dendrobium funiushanense* T.B.Chao, Z.X.Chen & Z.K.Chen, Bull. Bot. Res., Harbin 12: 119 (1992).

この一覧は, 異名 (Synonym) を全部並べたものなので, タイプ別に分けて書き直してみると, 次のようになる。

#### 鉄皮石斛タイプ

<sup>75</sup> 日本国の領土内には霍山石斛 (*Dendrobium huoshanense*) のタイプに該当するものの自生はないとするのが通説。

<sup>76</sup> 日本において「キバナノセッコク」として扱われているラン科植物のうち, 四国と九州に自生するものが黄花石斛 (*Dendrobium tosaense*) のタイプに該当する。

<sup>77</sup> 日本国の領土内には伏牛石斛 (*Dendrobium funiushanense*) のタイプに該当するものの自生はないとするのが通説。

<sup>78</sup> 日本において「キバナノセッコク」として扱われているラン科植物のうち, 南西諸島～台湾に自生するものが黄石斛 (*Dendrobium stricklandianum*) のタイプに該当する。

<sup>79</sup> *Dendrobium catenatum* Lindl., Gen. Sp. Orchid. Pl.: 84 (1830).

[http://apps.kew.org/wcsp/synonymy.do?name\\_id=57343](http://apps.kew.org/wcsp/synonymy.do?name_id=57343) [2014年1月4日確認]

<sup>80</sup> *Dendrobium catenatum* Lindley, Gen. Sp. Orchid. Pl. 84. 1830.

[http://www.efloras.org/florataxon.aspx?flora\\_id=2&taxon\\_id=242317237](http://www.efloras.org/florataxon.aspx?flora_id=2&taxon_id=242317237) [2014年1月5日確認]

*Dendrobium officinale* Kimura & Migo, J. Shanghai Sci. Inst. 3: 122 (1936).

黄花石斛タイプ

*Dendrobium stricklandianum* Rchb.f., Gard. Chron. 1877(1): 749 (1877).

*Callista stricklandiana* (Rchb.f.) Kuntze, Revis. Gen. Pl. 2: 655 (1891).

*Dendrobium tosaense* Makino, J. Bot. 29: 383 (1891).

*Dendrobium pere-fauriei* Hayata, Icon. Pl. Formosan. 6: 70 (1916).

*Dendrobium tosaense* var. *pere-fauriei* (Hayata) Masam., J. Soc. Trop. Agric. 4: 196 (1933).

霍山石斛タイプ

*Dendrobium huoshanense* Z.Z.Tang & S.J.Cheng, Bull. Bot. Res., Harbin 4: 142 (1984).

*Dendrobium funiushanense* T.B.Chao, Z.X.Chen & Z.K.Chen, Bull. Bot. Res., Harbin 12: 119 (1992).

近年、中国の鉄皮石斛栽培事業者の間では、この見解に従う者が比較的多くなっているように思われる。国際的な生薬取引を前提に、国際的に通用する学名を採用する趣旨と推定される<sup>81</sup>。

ただ、典型的なものを観る限り、確かに茎、葉、花の相違があるように思われるから、今後、Kew の分類のままでよいのかどうか、再検討すべき余地があるのではないかと思う。

#### 4.2 日本国政府における取扱い

日本国政府（環境省）及び都道府県のレッドデータブック（RDB）の上では、日本に自生するキバナノセッコクの学名は全て「*Dendrobium tosaense*」として扱われている。2014年1月1日現在の時点における指定組織名、学名及びRDBカテゴリを列挙すると、次のとおりとなる。

---

<sup>81</sup> ただし、欧米では、中薬（生薬）の効能・品質・安全性に対する懐疑心が根強く残っていることは事実だと思われる。例えば、英国政府の医薬品及び健康製品管理局（Medicines and Healthcare Products Regulatory Agency）は、中国で製造され英国に輸出される中薬（生薬）製品について、残留農薬や重金属汚染などがあるとして警告を発している。

All herbal safety warnings and alerts

MHRA: 19 August 2013

<http://www.mhra.gov.uk/Safetyinformation/Generalsafetyinformationandadvice/Herbalmedicines/Herbalsafetyupdates/Allherbalsafetyupdates/CON307402> [2014年1月4日確認]

環境省	<i>Dendrobium tosaense</i>	絶滅危惧 IB 類 (EN)
徳島県	<i>Dendrobium tosaense</i>	絶滅危惧 I 類 (CR+EN)
高知県	<i>Dendrobium tosaense</i>	絶滅危惧 IB 類 (EN)
大分県	<i>Dendrobium tosaense</i>	絶滅危惧 IB 類 (IB)
長崎県	<i>Dendrobium tosaense</i>	絶滅危惧 I 類 (CR+EN)
熊本県	<i>Dendrobium tosaense</i>	絶滅危惧 IA 類 (CR)
宮崎県	<i>Dendrobium tosaense</i>	絶滅危惧 IA 類 (CR-r,g,d)
沖縄県	<i>Dendrobium tosaense</i>	絶滅危惧 IA 類 (CR)

しかし、上記のとおり、国際標準である Kew の分類では、「*Dendrobium catenatum*」を正名とし、「*Dendrobium tosaense*」を「*Dendrobium catenatum*」の異名 (Synonym) としていることから、環境省及び都道府県における学名の指定は Kew の分類と相違するものとなっている。政府や都道府県における取扱いによって学問の自由 (日本国憲法 23 条) が侵害されてはならないので、相互に無関係だと言って終わらせることは可能だ。しかし、法的には様々な問題を生ずる可能性がある<sup>82</sup>。

詳論は避けるが、国際標準に合わせて「*Dendrobium catenatum*」として学名表記をするか、または、「*Dendrobium catenatum*」と「*Dendrobium tosaense*」とは異なる種であることを遺伝子レベルで科学的に証明した上で、Kew の分類を変更させるか、そのいずれかを選択する必要がある。

### 4.3 中国における分類

『中国植物志』は、Kew の分類における黄石斛 (*Dendrobium catenatum*) を鉄皮石斛、黄石斛及び霍山石斛の 3 種に分けて記載している<sup>83</sup>。以下、その概要を直訳 (抄訳) による引用によって示す<sup>84</sup>。

<sup>82</sup> 夏井高人「環境省 RDB におけるラン科植物絶滅危惧種名修正の必要性について」ラン・ネットワーク 8 号 12~52 頁

<sup>83</sup> 前掲『中国植物志 第 19 巻』117~119 頁

<sup>84</sup> 『中国植物志 第 19 巻』には、*Dendrobium stricklandianum* Rchb.f. (Syn. *Callista stricklandiana* (Rchb.f.) Kuntze) に関する記述がない。なお、前川文夫『原色日本のラン』(誠文堂新光社, 1971) 384 頁には、牧野富太郎によって報告されたキバナノセッコクの学名 *Dendrobium tosaense* を採用すべきものすることについて、「1877 年の『Gardener's Chronicle』p.749 に Reichenbach fil. が *D. Stricklandianum* なる種類を日本から記載しており、それが本種であるともいわれるが、せっか

鉄皮石斛 (*Dendrobium officinale* Kimura et Migo) <sup>85</sup>

異名 : *Dendrobium candidum* auct. non Lindl.

茎は直立し、円柱形、長さ 9~35 センチメートル

葉は 2 列、紙質、長円状披針形、長さ 3~4 (~7) センチメートル、幅 9~11 (~15 ミリメートル)、先端は鈍で、かつ、鉤状にやや反り返る。その基部は下方に延びて鞘のように茎を抱く。葉の縁と葉身は常に淡い紫色を帯びており、葉鞘には常に紫色の斑点がある。

安徽西南部 (大別山)、浙江東部 (鄞県、天台、仙居)、福建西部 (寧化)、広西西北部 (天峨)、四川 (地点不詳)、雲南東南部 (石屏、文山、麻栗坡、西畴) に産す。

海拔 1600 メートル以下の山地の半日陰・湿った岩の上に生える<sup>86</sup>。

黄石斛 (*Dendrobium tosaense* Makino) <sup>87</sup>

異名 : *Dendrobium pere-fauriei* Hayata ; *Dendrobium tosaense* var. *pere-fauriei* (Hayata) Masam.

茎は直立または下垂し、多少肉質、細い円柱形、長さ 20~25 (~50) センチメートル、幅 3~7 ミリメートル、枝分かれせず、多数の節があり、節間長は 2~4 センチメートルで、幹は後に淡黄色になる。

---

くよい記載と図とを伴った発表であるから、*D. Stricklandianum* の記載がよいものでないかぎり、その先取権を認めることはしないのが、学問として妥当の処置と考える」との見解が示されている。また、土佐にあるキバナノセキコクについて、牧野富太郎は、「せきこくハ此處彼處ノ岩上ニ多ク見マス きばなのせきこくハ餘計ニハアリマセン 此種ハ前々號ニ永沼君ガ言ハレタ如クせきこクノ變種デハナク全ク別種ノモノデアリマス」と述べている (『牧野植物學全集第 3 卷植物集説』(誠文堂新光社、1935) 1 頁に収録されている「土佐國ノ蘭科植物 (其一)」)。

<sup>85</sup> 前掲『中国植物志 第 19 卷』117 頁

<sup>86</sup> 鉄皮石斛は、どういうわけか主として北緯 30 度の緯度にある山地に自生するらしく、中国の自生としては、浙江省の大盆山、百山祖、雁蕩山及び天目山、湖南省の崑山、安徽省の大別山などにあるものが有名らしい。この点については、斯金平・俞巧仙・叶智根『仙草之首：鉄皮石斛養生治病』(化学工業出版社、2012) 1~12 頁が詳しい。

<sup>87</sup> 前掲『中国植物志 第 19 卷』117 頁

葉は革質，長円状披針形，長さ 4~7 センチメートル，幅は通常 10~15 ミリメートル，先端近くは急に尖っている。基部の鞘はやや斜めに歪み，かつ，拡大し，鞘のように茎を抱く。

江西南部（龍南），台湾（台東，花蓮）に産する。他の産地は日本（標準標本の産地）。

海拔 300~1200 メートルの山地の林内にある樹木の樹幹上または山谷にある崖の岩の上に生える。

#### 霍山石斛 (*Dendrobium huoshanense* Z.Z.Tang & S.J.Cheng) <sup>88</sup>

異名：*Dendrobium funiushanense* T.B.Chao, Z.X.Chen & Z.K.Chen

茎は直立し，肉質，長さ 3~9 センチメートル，基部から少しずつ上を向き上部になるにつれて細くなる。枝分かれせず，3~7 節があり，節間の長さは 3~8 ミリメートル，淡黄緑色，ときどき淡紫色の斑点を帯びることがあり，幹は後に淡黄色になる。

葉は革質，茎の上部に 2~3 枚斜めに出て互生し，舌状長円形，長さ 9~21 ミリメートル，幅 5~7 ミリメートル，先端は鈍でかすかに凹み，基部は鞘のように茎を抱く。

河南西南部（南召），安徽西南部（霍山）に産する。

山地の林内にある樹木の樹幹上及び山地の岩石上に生える。

本種は，細茎石斛 *Dendrobium moniliforme* Sw. と非常によく似ているが，本種の茎は比較的短く，基部上方が膨らんでおり，上方になるにつれて次第に細くなり，唇弁の中央裂片が半円状三角形をしているので，容易に識別することができる。

これらの微細な相違点は，Kew の分類では基本的に無視されているのではないかとと思われる。しかし，もしこれらの植物と他の植物との自然交雑や人工交配品が存在する場合，その系統を示す形質上の相違として出現する可能性がある形質的要素となり得ると考えられることから，決して無視することが許されないのではないかとと思う。

また，霍山石斛と細茎石斛の識別点について詳しく書いてあるのは，現実には見分けが付きにくい場合があるからだと思う。実際に観察してみると，確かによく似ており，セッコクに近い植物なのかキバナノセッコクに近い植物なのか判別し難いことがある。中国の古文献にある「石斛」がどのような植物を指すのかを考える場合においても，細茎石斛と霍山石斛とが非常によく似た

<sup>88</sup> 前掲『中国植物志 第 19 卷』118 頁

外形的特徴を有する植物だということを明確に認識した上で考察すべきだろうと思う。

#### 4. 4 石斛基原植物の遺伝子解析結果

ラン・ネットワークの代表でもある遊川知久氏らは、共同研究により、「石斛」  
として流通している中薬（生薬）の基原植物の遺伝子解析を行い、その結果を  
公表した<sup>89</sup>。学名を基準にして、その学名で示される植物の中薬名（生薬名）を  
まとめてみると、次のようになる<sup>90</sup>。なお、「楓斗（ふうとう）」とは石斛の茎を  
乾燥して折り曲げ、生薬として用いることができる状態にしたことを意味する。

##### *Dendrobium catenatum*

黄花石斛	(台湾)
特急梳唇石斛	(深圳)
龍頭鳳尾石斛	(深圳)
紫皮楓斗龍頭鳳尾	(廈門)
無銘	(広州)

##### *Dendrobium cucullatum*

無銘	(香港)
水草楓斗	(廈門)

##### *Dendrobium denudans*

水草楓斗一等	(廈門)
紅珠虫条石斛	(深圳)
虫珠楓斗特等	(廈門)

##### *Dendrobium devonianum*

紫皮楓斗特等	(廈門)
--------	------

##### *Dendrobium eriiflorum*

水草楓斗一等	(廈門)
紅珠虫条石斛	(深圳)
虫珠楓斗特等	(廈門)

##### *Dendrobium gregulus*

虫草楓斗小真虫	(廈門)
---------	------

---

<sup>89</sup> 前掲「Identification of *Dendrobium* species used for herbal medicines based on Ribosomal DNA-Internal Transcribed Spacer sequence database」

<sup>90</sup> 学名については、Kew の分類に基づいているので、中国における学名とは異なる。

紅珠虫石斛	(深圳)
<i>Dendrobium hancockii</i>	
無銘	(広州)
<i>Dendrobium hemimelanoglossum</i>	
虫珠楓斗特等	(廈門)
<i>Dendrobium linawianum</i>	
黄櫻石斛	(台湾)
櫻石斛	(台湾)
<i>Dendrobium lituiflorum</i>	
無銘	(広州)
<i>Dendrobium loddigesii</i>	
細茎石斛	(広州)
小環釵石斛	(広州)
<i>Dendrobium polyanthum</i>	
黄草石斛	(深圳)
<i>Dendrobium primulinum</i>	
黄草石斛	(深圳)
<i>Dendrobium regium</i>	
金釵石斛	(台湾)
<i>Dendrobium transparens</i>	
無銘	(広州)

この遊川知久氏らの遺伝子解析による研究成果から推定されることは、四川省・雲南省や台湾などで栽培されている南方系のセッコク属ラン科植物が適宜の中薬名（生薬名）を付されて流通しているという事実だ。現代においてそうだということは、過去においてもそうであったかもしれないという推論を発生させ得る。また、「細茎石斛」や「金釵石斛」といった非常に有名な名前のついたものであっても、実際には全く異なる植物が流通していることがあるということも示している<sup>91</sup>。

---

<sup>91</sup> このような事態が発生する背景事情としては、①濫獲により野生の細茎石斛 (*Dendrobium moniliforme*) が枯渇してしまった、②自然保護法令の運用が強化されたために野生の細茎石斛 (*Dendrobium moniliforme*) を採取することが非常に難しくなった、あるいは、③細茎石斛 (*Dendrobium moniliforme*) の人工栽培があまり進んでいないなどの事情があるかもしれない。なお、鉄皮石斛 (*Dendrobium officinale*) と霍山石斛 (*Dendrobium huoshanense*) については、中国において人工的な栽培技術が確立され、大量に生産され、その名で流通して



要するに、流通名を基準にして中薬（生薬）としての「石斛」の基原植物を考えることには一定の危険性が伴うということになる。流通名の類似性や関連性に重心を置いて考察すること（流通名を識別のための標識として属性を推定すること）は、種としての基原植物を推測するための構成要素としては問題が多すぎる。

同様のことは、観賞用の石斛や長生蘭についても言えることかもしれない。例えば、「〇〇」という品種が存在している場合において、通常は、その芽変わりによって中斑品種が発生したときは「〇〇中斑」という品種名になるはずなのだが、現実には流通している「〇〇中斑」なる品種が実は別の植物との交配実生品だということがあるかもしれない。もし万が一にもそのような事例が存在するとすれば、そのような品種の販売行為は、消費者保護関係の法令に抵触することがあり得るといえる結論になるだろう<sup>92</sup>。詳論は避ける。

## 5 細茎石斛の植物分類上の留意点

『神農本草經』にいう「石斛」が細茎石斛 (*Dendrobium moniliforme*) だと仮定した場合にも問題点は残る。それは、中国において細茎石斛 (*Dendrobium moniliforme*) として認識されているラン科植物と日本国においてセッコク (*Dendrobium moniliforme*) として認識されているラン科植物とが完全に同一の外形的形質を有するものではなく、若干異なるタイプのものであることが知られているからだ。また、日本国内に存在している野生種セッコク (*Dendrobium moniliforme*) にも何種類かの異なるタイプのものであることが愛好家の中では経験的に知られている。今後、この分野について同様の研究・検討をする場合、このような同一種内での変異という問題の本質を十分に咀嚼・理解しておかなければならないと考える。

### 5.1 西欧流植物分類学に基づく日本最初の石斛の記述

日本国において、リンネの理論に基づく西欧流の植物分類学を採用し、その分類体系に従いラテン語の学名を付した著述を残したのは、飯沼慾齋（1782～1865）だったとされている<sup>93</sup>。

---

いることは周知のとおりなのだが、それゆえに、鉄皮石斛と霍山石斛については代用品を調達する必要がないということも言えるかもしれない。

<sup>92</sup> 夏井高人「青色花の薔薇か薔薇咲きの堇草か」法律論叢 86 巻 4・5 号を参照されたい。

<sup>93</sup> 飯沼慾齋以前の時期における江戸時代の本草学の状況については、山田慶兒

飯沼慾齋の著作である『新訂草木圖説』には日本で最初と思われる「*Dendrobium moniliforme*」の記述がある<sup>94</sup>。すなわち、セキコク（石斛）は、「山中巖上ニ生ズ 莖 木賊（トクサ）ノ如クニシテ小 高五七寸 毎節一葉 形披針状ニシテ厚シテ光アリ 初夏ニ舊莖ノ梢上毎ニ花ヲ開ク 一或イハニ 形白及（シラン）花ニ似テ小 白色ニシテ粉紅ヲ帯ブヲ常トス 稀ニ紅暈深クシテ 殆ト淡紅花ナルアリ 柱頭帽下ニ葯アツテ 長葶子室トナリ 後 實ヲ結ブ等ノ形 ミナ 蘭類ノ常套ニ外ナラズ」とある。

基本的には古来の本草書の記載方法を踏襲しつつも、植物の生殖器の相違に着眼した近代的な分類方法に関する正確な理解に基づき、また、葉や茎の形状に関する精密な観察結果に基づき、仔細な記述となっているところは、まさに日本における西欧流の合理的な植物分類学の始祖ともいうべきものだ。

そして、この文に続けて、長生草（長生蘭）に関しても記述があり、「近世 此品并ニ風蘭ノ類ニ 草形 葉状ノ異品多々アリテ 好事之徒 玩弄尤モ盛ナリ 其種多クハ 一時ノ変態ニ出テ 花實ノ異アルコト鮮シ 故ニ 惣テ略之シテ 載セズ」とある。この『新訂草木圖説』が執筆されたのは江戸時代末期（幕末の頃）と推定されるから、そのころにセッコクの園芸品種である長生草（長生蘭）やフウランの園芸品種である富貴蘭の狂乱的なブームがあったことの歴史記録が残されていることにもなる。

飯沼慾齋の見解で特筆すべきなのは、中国の古文献にある「石斛」がシダ植物に似ているとの記述<sup>95</sup>について、トクサがそれに該当するという見解をもっていたということだ。トクサはスギナ（*Equisetum arvense*）と似て節のある棒状の直立する茎があるから、シダ植物の中では最も似ていると判断したのだろう。

なお、飯沼慾齋がセキコク（*Dendrobium moniliforme*）を同定するための要素として記述している構成要素にも大いに注目すべきだと考える。すなわち、「高五七寸」とあるから、草丈は 16.5 センチ～23.1 センチメートル程度、「毎節一葉 形 披針状ニシテ厚シテ光アリ」とあるから、茎の各節に 1 枚の葉があり、その葉は披針形で厚く<sup>96</sup>、光沢があり<sup>97</sup>、「初夏ニ舊莖ノ梢上毎ニ花ヲ開ク 一

---

編『東アジアの本草と博物学の世界 下』（思文閣出版，1995）が分かりやすい。

<sup>94</sup> 近世歴史資料研究会訳編『近世植物・動物・鉱物図譜集成第 IX 卷 新訂草木圖説（解説編）[諸国産物帳集成 第 III 期]』（科学書院，2007）723 頁による。

<sup>95</sup> 『山海經』にある「烏韭」、『神農本草經集注』にある「蚱蜢髀」など。これらは、もともとは、全てトクサ（木賊）を指していたのかもしれない。

<sup>96</sup> 北村四郎・村田 源・小山鐵夫『原色日本植物図鑑・草本編 III』（保育社，1969）61 頁は、「革質で光沢があり、披針形」としている。また、前掲『廣川薬用植物大事典（修正版）』190 頁は「葉は広線形～広ひ針形（ママ）で鋭先頭，革質」，「花は径約 3cm，純白色～淡紅色の美花」としている。これに対し、木村 康一，木村孟淳『原色日本薬用植物図鑑』（保育社，1964 年）127 頁には「葉身は長さ 3

或イハニ」とあるから、初夏のころ、当年に出た新芽から成長した茎ではなく前年以前に成長した古い茎（旧茎）の頂点に1個または2個の花を咲かせる植物であることになる<sup>98</sup>。

## 5.2 明治時代以降におけるセッコクの同定

明治時代以降には、牧野富太郎（1862～1957）をはじめ、多数の植物学者によって植物図鑑が編纂され<sup>99</sup>、セッコク（*Dendrobium moniliforme*）の記述がなされているが、基本的には飯沼慾齋を踏襲し発展させているものが多いように思われる。

ところで、このようなものとして理解されてきた日本のセッコクについて、

---

～5cmの広線形または広皮針形（ママ）で鈍頭、やや厚く草質（ママ）」とあり、また、日本の植物刊行会（代表・正宗巖敬）編『日本の植物第8巻 単子葉植物 II ラン科アヤメ科ユリ科』（高陽書院，1969）262頁は、「やや革質だ円状披針形（ママ）」としている。大場秀章監修・中島睦子著『日本ラン科植物図譜』（文一総合出版，2012）262頁にある図でもほぼ同じだと言える。異論があると予想されるが、日本国の領土内において野生のセッコク（*Dendrobium moniliforme*）だと考えられている植物の中には、①葉が披針形で先端が尖っているタイプのものと、②葉が楕円状披針形で先端が鈍頭であり、かつ、中心葉脈の左右で不ぞろいになっていて非対称形になっているタイプのものなど、少なくとも2種類以上の異なるタイプのものが存在していると考えられる。このことは、石斛の愛好家であれば誰でも知っていることなのだが、それが種の相違を意味するかもしれないという点については、これまであまり研究されてこなかったと言える。この点は特に重要だと考える。これらの中は、外来の園芸品種や非常に古い時代に渡来人が持ち込み植栽したもので、それが帰化したものが含まれている可能性はないとはいえない。また、逆の見解も成立可能かもしれない。詳細は避ける。

<sup>97</sup> 日本の野生セッコクと考えられる個体の中には、光沢が全くないものが多数ある。

<sup>98</sup> 高貴石斛（*Dendrobium nobile*）やその交配品では旧茎に花がつくだけでなく新茎にも花がつき、また、茎の頂点ではなく各節に複数の花を咲かせることがしばしばある。このことは、程度や頻度の差こそあれ、キバナノセッコク

（*Dendrobium catenatum* (Syn. *Dendrobium tosaense*）でも同じだ。逆から言うと、新茎にも花を咲かせるものや、茎の頂点ではなく、各節に複数の花茎（「Y」状の短い器官の付け根の部分）を出して花を咲かせるものは、高貴石斛やキバナノセッコクなどセッコク（*Dendrobium moniliforme*）以外のラン科植物の遺伝子が含まれている可能性があるということを示唆している。

<sup>99</sup> 俵 浩三『牧野植物図鑑の謎』（平凡社新書，1999）に明治時代当時の様子が描かれており、非常に興味深い。

北村四郎氏は、中国にある細茎石斛とは異なるものだとして、非常に興味深い論を残している。すなわち、「花被片は白色またはわずかに淡紅色をおびる。唇弁は卵状披針形で全縁である。『中国高等植物図鑑』八二二一図は細茎石斛 *D. moniliforme* (L.) Sw. 長江流域と南各省に産すとあるが、花黄緑色或白色帯淡紅色、唇弁卵状三角形、三裂とあるが (ママ)、日本のは花が黄緑色ではなく、唇弁は三裂でないから違う。『中薬大辞典』一二一〇石斛四細茎石斛 *D. moniliforme* 花淡黄緑色、唇弁黄緑色、中央有一褐色的斑点とあって、日本のセキコクと違う」とある<sup>100</sup>。確かに、江戸時代以降、明治時代に至るまでに刊行されたいかなる書籍を読んでも、花が黄色または黄緑色とするものはないから、日本の本来の野生セッコクと中国の細茎石斛との相違を示すものとして、非常に重要な指摘の一つとなるのではないかと思う。

### 5.3 中国における細茎石斛の理解

現在の中国で最も信頼できると思われる図鑑等を読んでも、実に異なるタイプの細茎石斛のことが記載されていることを知ることができる。

まず、『中国植物志』にある記載を直訳すると、「葉は数枚で、茎の中央より上のところに常に互生して生え、披針形または長楕円形で、長さ 3~4.5 センチメートル、幅 5~10 ミリメートル、先端は鈍でありやや不揃いに 2 裂し、基部は延びて鞘状に茎を抱く」、「花は、黄緑色、白色または淡い紫紅色を帯びた白色で、芳香がある」となる<sup>101</sup>。これは、日本で石斛として流通している植物の特徴の多くと重なっている。特に葉の先端の形状の記述には注目すべきだろう<sup>102</sup>。

他方、『中国野生蘭科植物彩色図鑑』にある記載を直訳すると、「葉は披針形、長さ 4~6 センチメートル、幅 7-9 ミリメートル、先端は急尖」、「花は直径 2~4 センチメートル、白色から淡い黄色、唇弁上には褐紅色斑点で組成される 1 条の狭い紅色の帯がある」となる<sup>103</sup>。ここに書かれている細茎石斛の特徴は、「野村」、「右近丸」、「八代」などの銘で流通している淡い黄色花を咲かせる石斛品種と酷似するものだ。もしかすると、これら黄色花を咲かせる石斛園芸品種は、中国産の細茎石斛そのものであるか、または、その交配品種のようなものなの

<sup>100</sup> 前掲『北村四郎選集Ⅱ 本草の植物』308 頁

<sup>101</sup> 前掲『中国植物志 第 19 卷』115 頁

<sup>102</sup> 葉の先端の形状に関する記述に着目すると、細茎石斛と高貴石斛との交配品または自然交雑種を細茎石斛として記述している可能性を否定できない。

<sup>103</sup> 前掲『中国野生蘭科植物彩色図鑑』181 頁

ではないかとも考えられる<sup>104</sup>。

結局、中国には、葉の先端部の形状について異なる特徴を示す少なくとも 2 種類以上のタイプの細茎石斛が存在することになる。実際には、かなり幅のある形質上の変異を含む複合体として細茎石斛を理解するのが妥当ではないかと思われる<sup>105</sup>。ただし、遺伝子解析を踏まえたより正確な分析を加えた後でなければ最終的な結論を出すことができない。

#### 5. 4 『本草圖譜』における石斛の絵姿

中国の細茎石斛について述べたことは、日本国において野生セッコクとして扱われているラン科植物でも全く同じだと考える。

岩崎灌園が文政 11 年（西暦 1828 年）に編纂した『本草圖譜』石草部にある石斛の図では、葉の先端が尖っている。



『本草圖譜』（大正 5 年重刷版）にある石斛の図（部分）

このことをどのように考えるべきか。それが、この問題を正しく考えるため

<sup>104</sup> 前掲『花卉園芸大百科 15 ラン』

<sup>105</sup> Jin Xiaohua, Chen Singchi, Luo Yibo, Taxonomic revision of *Dendrobium moniliforme* complex (Orchidaceae), HORTI-3108, 2008

の重要なヒントの一つになるのではないかと思う<sup>106</sup>。

## 5.5 日本のセッコクと中国の細茎石斛を対比する際の留意点

以上のことから、中国の古文献にある「石斛」が細茎石斛 (*Dendrobium moniliforme*) だと解する場合、上記のように複数の異なるタイプの細茎石斛が存在することに十分留意しなければならないと思う。

そして、仮に、①葉の先端が鈍で不揃いのタイプのもの、②葉の先端が2裂するタイプのもの、または、③葉の先端が凹んでいるようなタイプのものが高貴石斛 (*Dendrobium nobile*) との交配品または自然交雑だとする場合<sup>107</sup>、中国の古文献にある「石斛」は高貴石斛だと解しても半分は正しいことになるだろう。

同様に、仮に、とりわけ唇弁にある細かな斑点が集合して形成される斑紋の色が濃いものや花色が黄緑色を帯びるものなどについては、細茎石斛とされる植物の中に鉄皮石斛 (*Dendrobium catenatum* (Syn. *Dendrobium stricklandianum*; *Dendrobium officinale*; *Dendrobium huoshanense*; *Dendrobium tosaense*)) との交配品または自然交雑が含まれているとする場合<sup>108</sup>、中国の古文献にある「石斛」

---

<sup>106</sup> 現在、日本の内外に自生しているセッコク (*Dendrobium moniliforme*) の中には、花だけを比較した場合、日本国においては、撮影地不明ながら、イズミエイコ『日本の野生蘭』(東京新聞出版局, 1980) 209頁にある写真の被写体となったセッコク(古木の樹幹に着生しているもの)が酷似しているように思う。そして、外国においては、韓国濟州島産のものが最も似た特徴をもっていると思われる。なお、韓国濟州島でもこの図のような淡紅色のものと白色の花を咲かせるものがあるらしい。これらの点については、李永魯・李景瑞『韓국의野生蘭(濟州篇)』(蘭斗生活社, 1995)が詳しい。ただし、韓国濟州島のセッコク (*Dendrobium moniliforme*) の葉は、披針形で細長く、先端が尖っているように見えるが、仔細に観察すると、完全に左右対称にはなっておらず、わずかに不揃いとなっているようにも見える。この点について、이경서『新しい韓국의野生蘭 (새로운 한국의 야생란)』(新丘文化社, 2011) 233頁にあるセッコク (*Dendrobium moniliforme*) の図では、葉の先端が尖っているものとして描かれている。なお、村田懋麿編『鮮満植物字彙』(目白書院, 1932) 160頁によれば、「全南の濱海地方より莞嶋, 濟州嶋に渉りて生ず。その莖葉は専ら強壯劑に供せらる」とある。

<sup>107</sup> 園芸品種としての正式登録名は「*Dendrobium Cassiope*」となる。日本の石斛交配種を考える上で極めて重要な品種だ。このことは、夏井高人「セッコクのプライマリー交配品種(その1)」らん・ゆり(東京山草会ラン・ユリ部会ニュース) 432号15頁, 同「セッコクのプライマリー交配品種(その2)」らん・ゆり(東京山草会ラン・ユリ部会ニュース) 434号8頁で既に述べた。

<sup>108</sup> 園芸品種としての正式登録名は「*Dendrobium Ise*」となる。

は鉄皮石斛だと解しても半分は正しいことになるだろう<sup>109</sup>。

加えて、鉄皮石斛では、茎や葉に紫色の斑点が出るのが特徴とされているから、外形上では普通の細茎石斛のように見えても紫または紅の斑点が多数出るものについては、鉄皮石斛と細茎石斛との自然交雑または人工交配品であると疑うべき余地があると考えられる。

いずれにしても、これらの事柄は、最終的には、緻密な遺伝子解析によって結論を出すべきものではあるけれども、「石斛とは何か？」を考える場合にどうしても乗り越えなければならない非常に重要な課題の一つだと考える。

## 6 まとめ

中国の古文献にある「石斛」の産地に関する地名記載から現在の地名を割り出し、その地域に自生するラン科セッコク属植物を検討するという手法を用いて調べてみた結果、本来の意味での「石斛」とは、中国安徽省を中心に自生している細茎石斛と霍山石斛に種類を絞ることができた。そして、霍山石斛は、**Kew** の分類では鉄皮石斛と同じ植物であるとされておりながら、外形的特徴では細茎石斛と非常によく似た植物だということから推論すると、「石斛」とは、細茎石斛と霍山石斛の両方、または、どちらか一方を指すものと推定することが可能だと思われる。

ただ、自然交雑種や人工交配品が多数存在する可能性があり、今後、精密な遺伝子解析を踏まえた分類上の再検討が実施されるべきだろう。

他方、中国の細茎石斛と日本のセッコクには、葉の形状において異なる特徴を有する少なくとも 2 種以上のタイプのものであることが判明した。特に葉の先端部が尖っているのか、それとも、左右非対称であり鈍頭になっているのかの相違は大きいように思う。単純に 2 種類の変種または亜種があるというよりも、鈍頭のタイプのものは高貴石斛との交雑または交配品である可能性が示唆される。この点についても、今後、精密な遺伝子解析を踏まえた再検討がなされるべきだと考える。

このようにして、植物の名前という標識だけでは種の識別要素とすることができない場合に関する実証事例を追加することができたと思う。

今後、細茎石斛及び鉄皮石斛に関する研究・考察を更に深めると共に、広東

---

<sup>109</sup> Hui-Zhong Wang, Shang-Guo Feng, Jiang-Jie Lu, Nong-Nong Shi, Jun-Jun Liu, Phylogenetic study and molecular identification of 31 *Dendrobium* species using inter-simple sequence repeat (ISSR) markers, HORTI-3324, 2009 は、*Dendrobium officinale* と *Dendrobium moniliforme* とが遺伝子上では非常に近い関係にある植物だとの見解を示している。

石斛及び梵浄山石斛についても同様の検討を進めたいと考える。  
以上をもって本稿におけるまとめとする<sup>110</sup>。

---

<sup>110</sup> 本稿は、科学研究費補助金（基盤研究 B）「標章の保護と公共政策に関する総合研究」（研究課題番号 25285034）による研究成果の一部である。



## 中国古文献にみえる石斛の産地(参考写真)

夏井高人

### 花の相違



細茎石斛 (雲南産)



鉄皮石斛 (中国産)



黄花石斛 (日本産)

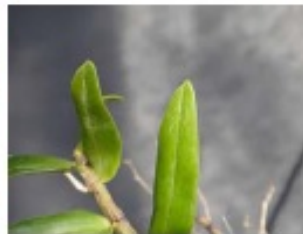


霍山石斛

### 葉(先端部形状)の相違



鉄皮石斛



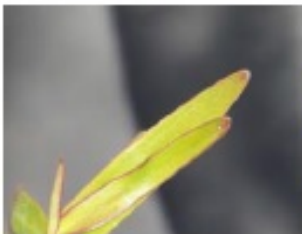
黄花石斛



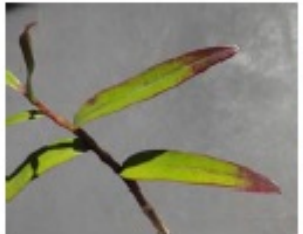
滇桂石斛



梵浄山石斛



細茎石斛 (雲南産)



石斛 (日本産野生種)



長生蘭「日本錦」



霍山石斛



高貴石斛



高貴石斛 (中斑)



細葉石斛 (竹葉石斛)



長生蘭「真鶴」